京都女子大学図書館所蔵「細川友済」本『方丈記』

――慶長三年幽斎校合本の転写本――

中前正志
久田麻未

京都女子大学図書館が所蔵する計二十三点の『方丈記』伝本については、中前「京都女子大学図書館所蔵『方丈記』伝本略目録稿　付．吉沢本（長享本）影印および『元亨』『文亀二年』本奥書写本翻刻」（中前編『東山中世文学論纂』私家版、平26、以下「中前略目録稿」）に概要を示し、それに先立ち平成二十四年に開催された中前担当の同図書館所蔵資料特別展観「方丈記八百年記念　長明と清盛―ゆく川、海へ―」（於京都女子学園建学記念館「錦華殿」）にて、全点を展示・公開した。また、右展観の目録には二十三点全ての部分写真を掲載するとともに、⑭巻子装袖珍写本（KN914/42/Ka41 図書ＩＤ番号 0002702355「⑭」は中前略目録稿に付した番号、以下同）の影印と翻刻も載せ、中前略目録稿には④「元亨」「文亀二年」本奥書写本（914.42/A6 008510506-6）の翻刻と㉓吉沢本（914.42/A6 008510494-9）の影印を掲げた。さらに、本誌第十二号には①元和三年写本（914.42/A6 008510495-7）の翻刻を掲げてもおいた。

本稿は、京都女子大学図書館所蔵『方丈記』伝本についての如上の検討を引き継ぐものであり、二十三点のうち③「細川友済」本（914.42/A6 008510500-7）を翻刻して、その基本的性格などにつき若干の考察を行おうとするものである。

その③について、中前略目録稿には、次の通り記しておいた。これに種々補正を加えることにもなろう。

江戸前期写。袋綴一冊。縦二二・九×横一六・二cm。表紙以外全二五丁。藍色工字崩し文様表紙。楮紙。外題「方丈記」（左上に打付書）。内題なし。一面八行。漢字交り平仮名文。「月影は」歌あり。奥書「雖悪筆憚多候、御望故、玄旨之本にて書写畢」。前表紙見返しに貼付された極札に「細川殿友済公方丈記［不明陽刻黒正方極め印］」。「玄旨」すなわち細川幽斎の所持本あるいは筆写本を、友済が書写したものと伝わる。友済については不詳。細川家永青文庫叢刊収載幽斎自筆本とは、本文が一致していない。ある武士の子の記事（後掲[a]）と「おほかた世をのがれ」の一小節（後掲[c]）を有する点、流布本系統の性格を示すが、日野山奥の方丈の庵の叙述（後掲[b]）は古本系統の本文と一致する。また、それら以外の箇所はほとんど古本系統と共通する。基本的には古本系統でありながら、流布本系統の性格も顕著に持つに至った、混熊本であると言えようか。本文冒頭に陽刻朱長方印「宝玲文庫」。

＊

③「細川友済」本は、まず広本であり、そして、右掲中前略目録稿の中で述べた通り、古本系と流布本系とを分かつ主要な指標とされる三点（後掲[a]～[c]）のうち、一点が古本系で二点が流布本系の特徴を示す（後掲翻刻A178～186行、250～259行、355～359行）という、両系が顕著に混態した性格を有している。右の三点以外で、古本系と流布本系とで本文が異なる箇所については、流布本系の本文もある程度認められるものの、大方は古本系の本文となっている。青木伶子『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院、昭40）において古本系と流布本系とで完全に本文が対立している箇所では、

277源都督のなかれ（古本系「源都督ノヲコナヒ」）

284あそひありく（古本系「遊行ス」）

などが流布本系の本文となっているが（数字は、後掲翻刻Aに付した行番号。括弧内の古本系本文は大福光寺本）、そ

れら以外95％ほどまでは古本系の本文と一致している。その他、『広本略本方丈記総索引』において両系に跨って見られるものの、流布本系の方により顕著に認められる本文も、

64おなしき四年（古本系「治承四年」）

146そのこゝろさし（古本系「ソノヲモヒ」）

175空へもとひあからす（古本系「ソラヲモトフヘカラス」）

334はくゝみあはれむといへとも（古本系「ハク、ミアハレムト」）

と散見するけれど、やはり一部に止まっている。

また、③には、『広本略本方丈記総索引』に取り上げられた諸本、あるいは冷泉家本（冷泉家時雨亭叢書所収影印）のいずれにも見られない独自異文が、それほど多くはないものの、例えば次の通り存する。（　）内は後掲翻刻Aに付した行番号、〈　〉内は大福光寺本など他本の本文。

a風にたえす吹みたしたる焔（32行）〈風ニタエスフキ、ラレタルホノホ、風ニタヘス吹ミタリタル焔〉

b焔にまつはれて（35行）〈ホノヲニマクレテ、ホノホニマクラレテ〉

c大なるつち風おりて（46行）〈ヲホキナルツシ風ヲコリテ〉

dみなうつり（72行）〈ミナ悉クウツロヒ、こと〳〵くうつり〉

eうれいなるかた（89～90行）〈イウナルカタ〉

fこほち出せりし（103行）〈コホチワタセリシ〉

g国々の民は（116行）〈国々ノ民或ハ〉

h或はさま〳〵の御祈（117行）〈サマ〳〵ノ御祈〉

i 金をかろくして（124行）〈金ヲカロクシ〉
j こひあり、人かと見れは（131行）〈こひありくかとみれは〉
k わりくたきけるにや（143～144行）〈ワリクタケルナリケリ〉
l かくて、おひたゝ敷（186行）〈カクヲヒタゝシク〉
m もしは日こと、ひゝとひませに、二三日なと（189～190行）〈もしは日こと、日ませ、二三日に一となと〉
n 害をなすものなれとも（191行）〈害ヲナセトモ〉
o あちきなきことを人みなのへて（195～196行）〈人ミナアチキナキ事ヲノヘテ〉
p 火事ある時（211行）〈炎上アル時〉
q たからおほけれは（214行）〈財アレハ〉
r 心恩愛につなかる（216行）〈心恩愛ニツカハル、心をんあいにつかる〉
s しらなみのをそれもさはし（229行）〈白波ノヲソレモサハカシ〉
t 一夜の宿をかり（238行）〈一夜ノ宿ヲツクリ〉
u 岩間にまいり（294行）〈石間ニマウテ〉
v 手のしもへ（341行）〈手ノヤツコ〉
w くるしきときはやすみつゝ（343行）〈クルシム時ハヤスメツ〉

ただし、右のうちｃｅｊｓなどは、単純な誤写によって生じた異文に違いあるまい。③には、そうした誤写の類が、目立って多いというわけではないが、種々見られもする。結局、大まかに言えば、③「細川友済」本は、基本的には飽くまで古本系統でありながら、流布本系統の特徴も有するに至った、両系が顕著に混態したもので、また、他に見難い

異文も、単純な誤写の類によるものも含め、いくらか見られる伝本である、ということになろうか。

＊

③「細川友済」本は、「……玄旨之本にて書写畢」という奥書を持っていて、「玄旨」すなわち細川幽斎の筆写本なり所持本なりを書写したものであると明かしているが、細川家永青文庫叢刊第十二巻『随筆紀行文集』（汲古書院、昭59）に影印が収載された慶長十年九月十七日の幽斎自筆本とは本文が一致していないと、右掲通り中前略目録稿の中で述べた。確かに、慶長十年幽斎自筆本が「古本系統に属するもの」（永青文庫叢刊収載野口元大「解題」）であるのに対して、先述通り、③は、主要な指標三点のうち二点が流布本系統の特徴を示す混態本となっている点、大きく異なる。また、例えば冒頭部にも、微細なものだが、

　　（後掲翻刻B4～5行）
　　（後掲翻刻A3～4行）

　　目世中にある人と栖と、又かくのことし。
　　③世中にある人すみかも、又かくのことし。

といった相違が見られる（目は慶長十年幽斎自筆本）。慶長十年幽斎自筆本は大福光寺本などと一致しているが、③は、同じ古本系統でも名古屋本（鈴木朖手沢本）や氏孝本と同一の本文となっている。そして、後掲翻刻A下段の主要校異から窺える通り、慶長十年幽斎自筆本との相違は、冒頭部に限らず全面に拡がってもいる。例えば

　　（216～217行）
　　（205～206行）

　　目雀の鷹孕巣にちかつけるかことし。
　　③雀の鷹の巣にちかへけるかことし。

といった事例は、慶長十年幽斎自筆本の本文を単純に誤写した結果の相違としても説明し得るものであろうし、

　　（187行）
　　（170～171行）

　　目声のほとりには
　　③都のほとりは

というような事例は、幽斎自筆本の明らかな誤りを訂した故の相違と捉え得るものであろう。こうした事例も含みつつ、それらのように非本質的な相違と片付け得るわけではない、

自是を友として遊行す　（302行）

③これを友としてあそひありく　（284～285行）

といった相違が、少なからず見られるのである。右の場合、慶長十年幽斎自筆本の方が古本系本文であるのに対して、③は、先にも挙げたが、流布本系本文となっている。

しかし、右のような種々の相違だけではなく、一方で、両本間に共通性を様々認めることもできる。慶長十年幽斎自筆本が名古屋本に近いこと、早くに指摘されており（川瀬一馬「細川幽斎自筆の方丈記について」〈『続日本書誌学之研究』雄松堂書店、昭55〉）、さらには名古屋本と近い氏孝本とも近いが、実は③も同じく名古屋本・氏孝本と近い本文を有しているようで、両者に共通する面が少なからず認められることになる。例えば、③の中の

これをまことかと尋ぬれは、昔ありし家はまれ成とこたへぬ。　（6～7行）

という記事の「とこたへぬ」は、『広本略本方丈記総索引』に取り上げられた諸本のうちでは、名古屋本と氏孝本のみに見られる本文だが、同本文は、

自是を誠かと尋ぬれは、昔有し家はまれ也とこたへぬ。　（8～9行）

と、慶長十年幽斎自筆本にも同じく見出せる。また、③の独自異文と見られるものをa～wまで先に列挙したが、それら二十三例のうちaklmnqtは、慶長十年幽斎自筆本においても、

a風にたへす吹乱したるほのを　（38行）

kわりくたきけるにや　（156～157行）

l かくて、をひたゝしく　（195行）
m もしは日こと、ひゝと日ませ、二三日に一度なと　（198～199行）
n 害をなすものなれ共　（201行）
q 宝多けれは　（226行）
t 一夜の宿をかり　（252行）

と同じになっている。これらは、③「細川友済」本と慶長十年幽斎自筆本とだけに共通する異文だということになる。

「玄旨之本にて書写」したと奥書に記す③「細川友済」本は、慶長十年幽斎自筆本と見比べるに、確かに、一方が古本系で他方が混態本という大きな違いがあるうえ、その他にも相違が目立ち一致しないのであって、「玄旨之本」は慶長十年幽斎自筆本ではあり得まい。ただ、注意されることには、その反面、同本との間に並々ならぬ関係を予測させるような共通性を認め得るのでもある。

＊

ところで、島津忠夫監修：加賀元子・田野村千寿子著『真字本方丈記影印・注釈・研究』（和泉書院、平6）に影印、碧冲洞叢書第四十二輯などに翻刻が、それぞれ収載される、武庫川女子大学附属図書館所蔵の保最本『方丈記』は、基本的に古本系統の伝本で、次の通りの朱筆による奥書を有している。

此一帖、依角坊光盛所望、染愚筆令書写之。遂／遂一校畢。猶可有烏馬焉誤者乎。／兵部大輔藤孝在判
右一冊、先年勝龍寺在庄之刻書与者也。今年、／日野方丈之旧跡遂一見帰路尋訪彼坊之時、／見此一帖不審之所多。
因茲以愚本重令校合／直付者也。／慶長三年五月十五日　幽斎玄旨在判
右之本者、長岡兵部大輔殿御自筆本。日野／依角坊ニ在之、借用候而写置者也。／上醍醐西谷行照坊／祐智

最後の祐智による書写奥書を除く第一・第二の奥書は、細川幽斎によるもの。日野法界寺角坊の光盛から所望され書写して与えた『方丈記』に、慶長三年五月十五日になってさらに、手許の本により校合を加えたのだ、という。

また、土肥慶蔵旧蔵本について、鈴木知太郎「方丈記諸本解説」（『方丈記』武蔵野書院、昭49重版）がかつて、保最本にある右の二つの幽斎の奥書と同じ奥書を有していて、「慶長三年五月十五日の奥書を持つ幽斎自筆本の転写本と見られる」こと、すなわち、幽斎が書き与え慶長三年五月十五日に校合を加えた本＝慶長三年幽斎校合本の転写本であるらしいことを、明かしていた。そして、同本と保最本との関係につき、保最本は「幽斎自筆本を祐智なる人が書写しておいたものを、さらに保叙が転写したもののようにも、一往は考えられ」、そうだとすれば同本は、幽斎による同じ奥書を持つ「土肥博士本と同一の本文を有するはずと思われるが、実際について比較すると、かならずしもそうではなくて、双方の間には、しばしば親子または兄弟の関係の存在を疑わしめるような点が少なくない」という、検討結果を提示している。つまり、右に掲げた幽斎の二つの奥書を有する保最本は、土肥慶蔵旧蔵本と同じく慶長三年幽斎校合本の転写本であるかのように思われるが、実際はそうではないということである。

しかし、慶長三年幽斎校合本にあるべき奥書を載せているのだから、保最本が同本と全く無関係というわけではないはずである。その点について鈴木氏は、保最本には「朱筆による校合がすこぶる多く」見られ、「その校合のほとんどすべてが、土肥博士本の本文に一致する」ので、保最本の「親本は土肥博士本（同時に、それは幽斎自筆本にも及ぶ。）ではない別本で、その朱筆によって校合に用いられたものこそ、すなわち土肥博士本、もしくはそれに準じ得べき一本であったと見るのが妥当であろう」と結論付けている。この見解を承けて、『広本略本方丈記総索引』も保最本について、保最が何らかの別本の「本文を写し終つて後、土肥博士本又はそれに準ずる一本を祐智が写し置いた本、を以つて朱校合を加へ、その識語（＝先に掲げた保最本奥書……引用者注）をも転載したもの、と解すべきもののやうである」とす

る。保最本は、慶長三年幽斎校合本などではなく別本の転写本でり、それに朱校合を加える際に対校本としたものこそが慶長三年幽斎校合本（の転写本）なのであって、それで、同本にあった奥書をも転載したらしい、ということである。

今、注目したいのは、保最本に多数見られるという朱校合であるのだが、右によれば、それが示す本文＝保最朱校合本文は、慶長三年幽斎校合本の本文と基本的に一致しているはずである。そして、慶長三年幽斎校合本の転写本と見られる土肥慶蔵旧蔵本は実は、現在所在不明であり、その影印や翻刻もないようで（国文学研究資料館編『鴨長明とその時代　方丈記　八〇〇年記念』〈平24〉所載神田邦彦「先行研究に見る、『方丈記』の諸本とその影印・翻刻・解題一覧（稿）」参照）、他に慶長三年幽斎校合本の本文を伝えるものも知られないから、保最朱校合本文が辛うじて同本の本文を部分的に窺わせるものということになる。となれば、それと慶長十年幽斎自筆本との関係が問題になるところであって、両者見比べるに、「漢字・仮名の表記の差異にとどまるものは別として、その異同は僅少であると言ってよい」ものの、「或は幽斎所持本に若干の本文校異が注記してあったがために、それを底本にして手写する場合に幾分の本文異同が生じたものでもあろうか」という憶測を生むような差異を少なからず含んでいる（前出川瀬論文）。具体的には後掲付表に示した通りで、保最本には朱筆による校合が二百六十箇所ほど見られるが、そのうちの約50％の校合本文≠慶長三年幽斎校合本本文が慶長十年幽斎自筆本の本文と一致していて、残りの約50％が一致していない。因みに、先述通り同本に近いとされる名古屋本の場合、保最朱校合本文との一致度は約30％に止まっている。

では、その慶長十年幽斎自筆本との間に並々ならぬ関係を持っているものと先に予測されもした③「細川友済」本の場合がどうかと言えば、保最朱校合本文の約70％と一致している。後掲付表参照。名古屋本そして慶長十年幽斎自筆本よりもかなり一致度が高く、慶長十年幽斎自筆本と一致している保最朱校合本文は、そのうち95％以上が③「細川友済」本とも一致していて、慶長十年幽斎自筆本と一致しない保最朱校合本文のうち半分以上が③「細川友済」本とは一致し

ている。また、③「細川友済」本と慶長十年幽斎自筆本との主要校異を翻刻Ａの下段に掲げたが、それらのうちの約四分の一では、③「細川友済」本の本文の方が保最朱校合本文と一致していて、逆に慶長十年幽斎自筆本の方が保最朱校合本文と一致する事例はほぼ皆無である。慶長十年幽斎自筆本よりも③「細川友済」本の方が余程、保最が朱校合において対校本とした慶長三年幽斎校合本あるいはその転写本と見られる土肥慶蔵旧蔵本に近い、ということになる。

＊

さらに、『広本略本方丈記総索引』に取り上げられた諸本あるいは冷泉家本いずれにも見られない、③「細川友済」本の独自異文を、先にａからｗまで挙げたが、それらのうちｃｅｊｓのような単純な誤写による異文以外のものと、保最朱校合本文とを見比べるに、ただ近いというだけでは済まなくなるように思われる。

ａ～ｗの中で慶長十年幽斎自筆本だけとは特に一致することを先に指摘した七箇所の本文ａｋｌｍｎｑｔのうち、ｋｌｍ以外は、保最本に朱筆で校合された保最朱校合本文と完全に一致している。次の上段が③「細川友済」本の本文、下段が保最本の該当箇所で、（　）内の数字は、後掲付表の通し番号。

ａ風にたえす吹みたしたる焔　　風にたへす吹みた（した）。る炎（22）

ｎ害をなすものなれとも　　害をなせとも（すものなれ）（144）

ｑたからおほけれは　　財あれは（多けれ）（166）

ｔ一夜の宿をかり　　一夜の宿をつくり（か）（179）

ａの場合、③が「風にたえす」「焔」であるのに対して保最本は「風にたへす」「炎」であって小異あるが、注目すべきは、③と慶長十年幽斎自筆本だけに共通すると見られた異文「吹みたしたる」。それは、保最本自体の本文「吹みたる」とは異なるが、その箇所に朱筆によって校合が加えられた本文「吹みたしたる」と一致している。他も同様であって、

これらａｎｑｔの四箇所の本文については、③「細川友済」本と慶長十年幽斎自筆本とだけに共通する本文でなく、さらには保最朱校合本文＝慶長三年幽斎校合本（の転写本）も合わせた三本間で共通する本文であったことになる。

そして、単純な誤写によるｃｅｊｓおよび慶長十年幽斉自筆本と一致するａｋｌｍｎｑｔを除いた、③「細川友済」本のまさに独自異文と見られた本文のうち、ｂｆｉｏｐｕｖも、次の通り保最朱校合本文と一致している。上段が③「細川友済」本の本文、下段が保最本の該当箇所。

ｂ焔にまつはれて　　ほのほにまくれて（24）
ｆこほち出せりし　　壊ち渡せし（69）
ｉ金をかろくして　　金を軽くし（83）
ｏあちきなきことを人みなのへて　　人皆あちきなきことを。のへて（148）
ｐ火事ある時　　炎上ある時（162）
ｕ岩間にまいり　　いはまにまうて（211）
ｖ手のしもへ　　手のやつこ（242）

これら七箇所の本文は、③「細川友済」本と保最朱校合本文＝慶長三年幽斎校合本（の転写本）とのみに共通して見られる本文ということになる。先の四箇所ａｎｑｔを合わせて言えば、当初③「細川友済」本だけの独自異文と見られたものａ～ｗのうち、実際は、計十一箇所の本文が慶長三年幽斎校合本（の転写本）と一致していて、その中の四箇所の本文は加えて慶長十年幽斎自筆本とも一致しているが、残りの七箇所の本文は、慶長三年幽斎校合本（の転写本）としか一致しない、ということである。十一箇所というのは、ａ～ｗの中から単純な誤写によると見られる異文を除いたもののうちの、約六割に相当している。両本の密接な関係が想定されるべきだろう。

＊

③「細川友済」本は、保最朱校合本文つまりは慶長三年幽斎校合本（の転写本）の本文に、慶長十年幽斎自筆本よりも余程近く、そのうえさらに、同本（の転写本）との共通異文を相当数含んでいるのである。土肥慶蔵旧蔵本も慶長三年幽斎校合本も直接見ることができず、それらと逐一比較対照して確認することはできないのだが、上のような状況からは、③「細川友済」本も土肥慶蔵旧蔵本と同様、慶長三年幽斎校合本の転写本である、ということが想定されてこないだろうか。その想定通りであるならば、③が慶長三年幽斎校合本（の転写本）と余程近くて独自異文を共有していても、無論何ら不思議ではないことになる。また、先に引いた保最本の奥書のうち第一、第二の奥書が、土肥慶蔵旧蔵本にもあり、幽斎が書写し校合を加えた慶長三年幽斎校合本の奥書であると見られること、先述の通りだが、同奥書に「幽斎玄旨」などと見えるから、③がその慶長三年幽斎校合本の転写本であるとすれば、先掲通り③が奥書に「……玄旨之本にて書写畢」と記すのも、極めて自然に説明がつくだろう。そして、「玄旨之本」が慶長十年幽斎自筆本ではあり得まいことは先に述べたが、実はそれは慶長三年幽斎校合本の方であったということになる。

ただ、③が慶長三年幽斎校合本の転写本であるならば、同じ慶長三年幽斎校合本（の転写本）によって校合を加えた結果である保最朱校合本文と完全に一致していてもおかしくないはずであるのに、同本文との一致度は先述通り、約70％に止まっている。しかし、③は慶長三年幽斎校合本そのものでなく同本の飽迄転写本であり、保最が対校本に用いたのもやはり同本の転写本であるかもしれず、また、その保最の校合自体が完全なものとも限るまい（碧冲洞叢書第四十二輯「解題」参照）。こうした状況を考慮するならば、一致度約70％という数値は、むしろ自然なものに思える。

また、先掲中前略目録稿にも述べた通り、③は、ある武士の子の記事と「おほかた世をのがれ」の一小節を有する点、流布本系統の性格を示すが、日野山奥の方丈の庵の叙述は古本系統の本文と一致し、それら以外はほとんど古本系統と

共通するのであって、そのように両系統の混態した特異な本文を有する③を、慶長三年幽斎校合本の転写本と見なして問題ないのか、不安を覚える面もある。しかし、先引通り土肥慶蔵旧蔵本が慶長三年幽斎校合本の転写本であることを明かした鈴木知太郎「方丈記諸本解説」がまた、その土肥慶蔵旧蔵本と保最本自体との間の差異について述べるなかで、「土肥博士本に存する流布本系統の長文二箇所をこの本（＝保最本…引用者注）が有しないことの差」と記述している点に注意するならば、上の不安は氷解する。「流布本系統の長文二箇所」とはある武士の子の記事と「おほかた世をのがれ」の一小節であるに違いなく、慶長三年幽斎校合本の転写本である土肥慶蔵旧蔵本も、それら両記事を含んで③と同じ形に混態した本文を有していたようである。つまり、③が先述通りの混態した特異な本文になっているのはむしろ、③が慶長三年幽斎校合本の転写本ではないかとの想定に、一つの大きな裏付けをもたらすものとなるに違いない。

ここに至って、③「細川友済」本が慶長三年幽斎校合本の転写本であること、最早ほぼ動かし難いところとなったのではなかろうか。ならば、先述通り、土肥慶蔵旧蔵本は見ることできず、慶長三年幽斎校合本の他の伝本も知られないので、今のところ③「細川友済」本が、慶長三年幽斎校合本の全貌を窺い知ることのできる唯一の伝本ということになる。慶長三年幽斎校合本の全貌が③によって明らかになったとすれば、それと慶長十年幽斎自筆本との関係が改めて検討されなければならないところであろうが、今は、③と慶長十年幽斎自筆本との関係について先述した、両者一致しない反面、並々ならぬ関係を予測させるような共通性も認められるということが、ほぼそのまま、慶長三年幽斎校合本と慶長十年幽斎自筆本との関係に当てはまることになるという点だけを確認しておいて、具体的にいかなる関係にあるのかなどについては別の機会に譲ることとしたい。

なお、③の前表紙見返しに貼付された極札に「細川殿友済公」とあることについて、中前略目録稿では「細川幽斎の所持本あるいは筆写本を、友済が書写したものと伝わる。友済については不詳」と述べたが、「友済」はすなわち「幽斎」

であって、③の奥書に「……玄旨之本にて書写畢」とあるのによって「細川殿友済公」としたのだろう。中前略目録稿に③を「伝細川友済筆写本」と称していたのも訂正が必要で、本稿では仮に「『細川友済』本」としておいた。

＊

ともに慶長三年幽斎校合本の転写本であるらしい③と土肥慶蔵旧蔵本がいずれも、先述通りの混態化した本文を備えているのであれば、そもそも慶長三年幽斎校合本自身も同様の混態本であった可能性が極めて高いであろう。従来、古本系と流布本系との本文上の大きな相違として、

a 流布本系には、土塀が崩れてある武士の子が圧死したという内容が大地震の叙述の中に加わっているが、古本系にはそれがない。（後掲翻刻A178～186行に相当）

b 日野山奥の方丈の庵の様相を叙述した文章が、古本系と流布本系とで大きく相違する。（同右250～259行に相当）

c 流布本系には、「おほかた世をのがれ……をり〳〵の美景に残れり」の一小節が結末部に存するが、古本系にはそれがない。（同右355～359行に相当）

という三点が挙げられ、これらが両系統を分かつ主要な指標と捉えられてきた。右のうちaとcについては流布本系特有の記事を有しているのに対して、bについては古本系の方と一致しており、それら以外の箇所は概ね古本系統と共通していると、中前略目録稿の中で③について述べたことは、そのまま土肥慶蔵旧蔵本そして慶長三年幽斎校合本にも当てはまることになろう。そうした形の混態化は、比較的容易に起こり得たに違いあるまい。例えば鴨長明学会発行の複製本がある名古屋本の場合、古本系統の本文のそれぞれ該当箇所の余白に朱筆で右のaとcにおける流布本系特有の記事が書き込まれているが、同様の伝本を書写する際に、それら書き込み記事が本文に組み込まれればすぐに、右の如き形の混態本が出来上がるからである。そういう形の混態本が少なくとも慶長三年には生み出されていたことになる。

中前略目録稿にて特に取り上げた④「元亨」「文亀二年」本奥書写本も混態本であったが、右の場合とは形が違っていた。基本的に古本系の本文を有しつつ、[a]についても流布本系特有の記事が見られず古本系と一致するが、[b][c]については流布本系の方と一致している。本文の有無の相違ではない[b]の場合、[a]や[c]について右に述べたのと同じようにして単純に流布本系本文へと転じるとは考え難いであろうから、右の場合に比べればそれほど容易には生じ得ないのでは、と推量される形の混態であろう。中前略目録稿にて述べたように、④に見られる「元亨」の本奥書はあまりに不完全なもので信頼を置き難いが、「文亀二年」（一五〇二）の本奥書の方には特に問題が感じられず、基本的に同時点の本文を伝えるものと認め得るように思われる。そうだとすれば、そして今回新たに判明した、慶長三年幽斎校合本も先の通りの混態本であったらしい点を加えるならば、古本系と流布本系を分かつ指標とされるような大きな相違点に亘ってまでの混態化が、早くも近世以前に種々の形で進んでいたことを窺わせるであろう。そのことは、『方丈記』本文流伝史の問題としては大いに注目しておいていいことに違いあるまい。

翻刻A「細川友済」本　付．慶長十年幽斎自筆本との主要校異

【翻刻凡例】

・翻刻に際しては、基本的に通行字体に改めるとともに、私に句読点等を施した。

・行送りは元のままとし、行番号を五行ごとに行頭に付した。また、半丁ごとに、その末尾を、　」1オなどと示した。

【校異凡例】

・翻刻の下段に、「細川友済」本（＝慶長三年幽斎校合本の転写本と見られる）と永青文庫所蔵慶長十年幽斎自筆本との主要校異を示す。

・「3」などは、「細川友済」本翻刻に付した行番号で、その下は同本の本文。複数行に及ぶ本文の場合、最初の行の番号

のみ示す。

・（　）内の「4」などは、後掲翻刻②慶長十年幽斎自筆本に付した行番号で、その下は、（　）の上に示した「細川友済」本本文に対応する慶長十年幽斎自筆本の本文。行番号の示し方は、前項に同じ。

・（　）内の「ナシ」は、その上に示した「細川友済」本本文に対応する本文が慶長十年幽斎自筆本にないことを示す。

ゆく河のなかれはたえすして、しかももとの水に
あらす。よとみにうかふうたかたは、かつ消か。むす
ひて、久と、まることなし。世中にある人すみかも、
又かくのことし。玉敷の都のうちにむねをなら
5へ、甍をあらそへる、たかきいやしき人、すまひは、
代々をへてつきせぬ物なれと、これをまことかと
尋ぬれは、昔ありし家はまれ成とこたへぬ。ある
いは、こそやふれてことしつくれり。或は、大家は
ほろひて小家となる。すむ人も是おなし。所もか
10はらす人もおほかれと、いにしへ見し人は卅人か中
にわつかに一人二人なり。朝に生れ夕にしぬる
ならひ、たゝ水の泡にそにたりける。しらす、むまれ
しぬる人、いつかたより来ていつかたへかさる。又しらす、
かりのやとり、たか為に心をなやまし、何により

」1オ

3人すみかも（4人と栖と）

5人、すまひ（7人のすま居）

9かはらす（11かはらて）

11朝に生れ夕にしぬる（13朝に死夕に生るゝ）

13しぬる（15死する）

14為に（17為にか）

15てか目をよろこはしむる。そのあるしとすみかと
無常をあらそふさま、いはゝ槿の露にことならす。
或は、露おちて花残れり、残るといへとも朝日に
かれぬ。或は、花しほみて露なをきえすといへ
とも夕をまつことなし。予、ものゝ心をしれり
20しより四十の春秋を送るあひたに、世の不思
議を見ること、やゝたひ〳〵に成ぬ。去安元三年
四月廿八日かとよ、風はけしく吹てしつかな
らさりし夜、戌の時はかりに、都の東南より火出
来ていぬゐにいたる。はては朱雀門・大極殿・大学
25寮・氏部省まてうつりて、一夜の中に塵灰と
なりにき。火もとは、樋口冨少路とかや、病人を
やとせるかりやより出来けるとなむ。吹まよふ風に
とかくうつりゆく程に、扇をひろけたることく
末ひろに成ぬ。又、遠き家は煙にむせひ、ちかきあ
30たりはひたすら焔を地に吹つけたり。空に灰を
吹たてぬれは、火の光に映(エイ)して、あまねくくれな
ゐなる中に、風にたえす吹みたしたる焔、とふか

」1ウ

」2オ

」2ウ

18きえすといへとも（22きえす、消すといへとも）

24いぬゐ（28西北）　24はては（28はてには）
25氏部省（29民部省）
26冨少路（31冨小路）
28とかく（32とく）

ことくして一二町をこえつゝうつりゆく。その中の
人、うつゝの心あらむや。或は煙にむせひてたふれ
35ふし、或は焔にまつはれてたちまちにしぬ。或は
身ひとつからうしてのかるれとも、資財をとり
いつるに及はす。七珍万宝さなから灰燼となりにき。
そのつゐえいくそはくそ。今般公卿家十六やけ
たり。ましてその外はかそへしるすに及はす。す
40へて都のうち三分か一におよへりとそ。男女し
ぬるもの数十人、馬牛のたくひ辺際（ヘンサイ）も知らす。人
のいとなみをろかなる中に、さしもあやうき京中
の家をつくるとて、たからをついやし心をなやます
ことは、すくれてあちきなくそ侍へき。又、治承
45四年卯月十二日の比、中御門京極のほとりより
大なるつち風おりて、六条わたりまていかめしく
ふくこと侍き。三四町をかけて吹まくる間に、其
中にこもれる家とも、大なるも少も一としてやふ
れさるはなし。さなからひらにたふれたるもあり。
50けたはしらはかりのこれるもあり。門のうへを

」3オ

」3ウ

33ことくして（38ことくにして）　33うつりゆく（39ナシ）　33中の（39中にある）
35まつはれて（41まくられて）

38今般（44此たひ）　38公卿家（44公卿の家）
39すへて（46惣して）

41辺際も知らす（48辺際をしらす）
41人の（48ナシ）

44侍へき（51侍る）

46おりて（53おこりて）

48少も（56ちいさきも）

吹はなちて、四五町かほかにをき、又、かきを吹はら
ひて、となりとひとつになせり。いはむや、家のうち
の資財、かすをつくして空にあかり、ひはたふ
き板のたくひ、冬の木の葉の風にみたるゝか
55ことし。ちりを煙のことくにふきたてぬれは、す
へてめも見えす。おひたゝしくなりとよむをとに、
ものいふ声もきこえす。地獄の業風なりとも
かはかりにこそとそおほえし。家の損亡するの」4オ
みにあらす、これをとりつくろふ間に身をそこ
60なひて、かたわつける物、かすをしらす。このかせひ
つしさるの方にうつりゆきて、おほくの人のな
けきをなせり。つち風はつねに吹ものなれと、
かゝることやはある。たゝことにあらす、さるへきもの、
さとしかなとそうたかひ侍し。又、おなしき四年の」4ウ
65みな月のころ、にはかに都うつり侍りき。いとおもひ
のほかなりしことなり。おほかたこの京のはしめを
きけは、嵯峨天皇の御時ことさたまりにける
より後、すてに数百歳をへたり。ことなるゆへな

55ことくに（63ことく）

62吹ものなれと（71吹風なれ共）

64おなしき四年の（73同四年）

67さたまりにける（76定ける）

くてたやすくあらたまるへくもあらねは、これを世
70の人やすからすうれへあへるさま、ことはりにもす
きたり。されと、かくいふかひなくて、みかとよりはし
めたてまつりて、大臣公卿みなうつり給ひぬ。
代につかふる程の人、たれかひとり古郷に残りお
らむ。つかさくらゐにおもひをかけ、主君のかけ
75をたのむ程の人は、一日なりともとくうつらむと
はけみあへり。時をうしなひ世にあまされ、期
するところなきものは、うれへなからもとりおり。
軒をあらそひし人のすまゐ、日をへつゝあれゆ
ゆく。家はこほたれて淀川にうかひ、地はめ
80のまへにはたけとなる。人の心もあらたまりて、た、
馬鞍をのみおもくす。牛車を用とする人なし。
西南海の所領をねかひて、東北国の庄園
をこのます。そのとを、をのつからことのたより
有て、津の国いまの京にいたりて、所の有様
85を見るに、その地ほとせはくて、条里をわるに
たらす。北は山にそひてたかく、南は海ちかく

」5オ

」5ウ

70ことはり（79さる理）　70すきたり（79過たりき）　71されと（79されとも）
71かくいふかひなくて（80とかくいふかひなく）　72たてまつりて（80たてまつり）
72みな（81皆こと〳〵く）
75うつらむ（84うつろはん）
77とりおり（86留りをり）
78あれゆゆく（87あれゆき）
82ねかひて（91ねかひ）
83そのとを（92其時）
84津の国いまの京（93津の国の今の京）

てくたれり。波の音つねにかまひすしく、し
ほかせことにはけし。内裏は山の中なれは、
かの木の丸殿もかくやと、中〳〵様かはりて、うれ
90いなるかたも侍りき。日々にこほちて、河もせに
はこひくたす家は、いつくにつくれるにかあらむ。
なを、むなしき地はおほく、つくれる屋は少し。
古郷はすてにあれて、新都はいまたならす。あり
とある人はみな、うき雲のおもひをなせり。もと
95よりこの所におるものは、地をうしなひてうれへ、
今うつりすむ人は、土木のわつらひある事をなけき、
みちのほとりを見れは、車にのるへきは馬にのり、衣
冠布衣なるへきはひたゝれを着たり。都の条里
たちにあらたまりて、たゝひなひたるものゝふにことな
100らす。世のみたるゝすいさうとかきをけるもしるく、日を
へつゝ、世中うきたちて、人の心もおさまらす、氏のう
れへつゐにむなしからさりけれは、同としの冬、なを
この京にかへり給ひにき。されと、こほち出せりし
家ともは、いかゝ成にけるにか、こと〳〵くもとのやうに

」6オ

」6ウ

」7オ

89うれいなる（99優なる）

96なけき（105歎く）
97のるへきは（106のるへききはゝ）
98なるへきは（107なるへきはおほく）
99たちに（108忽に）

101氏（111民）

103出せり（113わたせり）

105しもつくらす。つたへきく、いにしへのかしこき御代
には、あはれひをもて国をおさめ給ふ。すなはち、
御殿にかやをふきて、軒をたにもとゝのへす、煙の
ともしきを見給ふ時は、かきりあるみつきものを
さへゆるされき。これ、民をめくみ世をたすけ給に
110よりてなり。今の世の有様、むかしになそらへて知ぬ
へし。又、養和のころかとよ、久なりて覚えす。二とせか間
世中飢渇して、あさましきこと侍りき。或は春夏
日てり、或は秋大風大水、よからぬ事ともうちつゝき、
五穀こと〳〵くみのらす。むなしく春田かへし夏う
115ふるいとなみありて、秋かり冬おさむるそめきなし。
是によりて、国々の民は家をわすれて山にすみ、
地を捨てさかひを出ぬ。或はさま〳〵の御祈はし
まりて、なへてならぬ法ともおこなはるれとも、更
そのしるしなし。京のならひ、なにはに付ても、みな、
120もとはゐ中をこそたのめるに、たえてのほる物
なけれは、さのみやはみさをもつくりあへむ、念
しわひて、さま〳〵のたから物かたはしより捨るかこと

」7ウ

」8オ

106もて（116もつて）
107ふきて（117ふきても）
110よりて（119よて）　110なそらへて（120なすらへて）
116民は（126民、或）
117地を（127或地を）　117或は（127ナシ）

くすれとも、更にめ見たつる人なし。たま〳〵かふる物は、
金をかろくして粟をおもくす。乞食みちのほと
りにおほく、うれへかなしむこゑ耳にみてり。前の
年、如比して暮ぬ。あくるとしはたちなをるへきかと
おもふ程に、あまさへ疫癘うちそひて、まさるさまにあ
とかたなし。人みなやみ死にけれは、日をへつゝきは
まりゆくさま、少水の魚のたとへにかなへり。はては、笠
うちき足ひきつゝみ、よろしきすかたしたるもの、ひ
たすら家ことにこひあり、人かと見れは、則たふれふ
し死ぬ。ついちのつら路のほとりにうへしぬるもの、
たくひ、かすもしらす。とりすつるわさもしらねは、くさき
風世界にみち〳〵て、かはりゆくかたち有様、めもあてら
れぬことおほかりき。いはむや、河原なとには、馬車の
ゆきちかふみちたにもなし。あやしのしつ山かつも力
つきて、薪さへともしくなりゆけは、たのむかたなき人は、
みつから家をこほちて市に出てうるに、一人かもて
出ぬるあたひ、なを一日かいのちをさゝふるにたにおよ
はすとそ。あやしきことは、かゝる薪の中に、あかき丹つ

」8ウ

」9オ

124かろくして（134かろくし）
125おほく（135ナシ）
126暮ぬ（136ナシ）
127疫癘（137疫病）

131あり、人かと見れは（142ありくかとすれは）131則たふれ（142皆うちたふれ）
133くさき風（145くさき香）
135おほかりき（147おほかり）

き、薄なと所〳〵にみゆる、あひましれり。是を尋ぬれ
は、すへきかたなき物の、ふるき寺にいたりて仏を
ぬすみ、堂の物の具をやふりとりて、わりくたき
けるにや。濁悪の世にしもむまれあひて、かゝる心
145うきわさをなむ見侍し。又、いとあはれなることも侍り」9ウ
き。さりかたき妻夫なともちたるものは、そのこゝろ
さしまさりてふかき物は、かならすさきたちて死ぬ。そ
のゆへは、わか身をは次にして、人をいたはしくおもふほ
とに、得たる食物をもまつかれにゆつるによりて也。
150されは、おやこあるものは、さたまれる事にて、おや
そさきにたちにける。又、母かいのちつきたるをしらす
して、いとけなき子の、乳をすひてふせるなともありける。」10オ
仁和寺に隆暁法印といふ人、かくしつゝ数もしらす
しぬることをかなしみて、ひしりあまたかたらひつゝ、その
155かうへのみゆることにひたゐに阿字をかきて、縁をむ
すはしむるわさをなむせられける。その人かすをしらん
とて、四五両月かほとかそへたりけれは、京の中、一条よりは
南、九条よりは北、京極よりは西、朱雀よりは東の、みち

141是を（154是）
146妻夫（159夫妻）　146こゝろさし（160思ひ）
147物は（161者）
148わか身をは（161我身を）
151つきたるを（165つきたるをも）
152いとけなき（166いときなき）　152ありける（166有けり）　153仁和寺に（167仁和寺の）
154こと（168ナシ）　154かたらひつゝ（168かたらひて）　155阿字（169ア字）　155むすはしむる（170むすはしめしむる）　156その（171ナシ）　157ほとかそへ（171ほとをかそへ）

のほとりなるかうへ、すへて四万二千三百余なむあり
160ける。いはんや、その前後に死ぬるものもおほく、又、河原」10ウ
白河西京、もろ〳〵の辺地なとをくはへていはゝ、さいけん
もあるへからす。いかにいはむや七道諸国をや。崇徳
院の御くらゐの御時、長承のころとかや、かゝるた
めし有けるときけと、そのありさまはしらす。まのあ
165たりいとめつらかなりし事也。又、建久元年七月九日かと
よ、おひたゝしきおほないふること侍りき。そのありさ
まよのつねならす。山はくつれて河をうつみ、海は
かたふきて陸地をひたせり。土さけて水涌出、いはほ
われて谷にまろひ入。なきさこく舟は浪にたゝよ」11オ
170ひ、みちゆく馬はあしのたちとをまとはせり。都のほ
とりは、在々所々、堂舎塔廟ひとつとしてまたからす。
或はくつれ、或たふれぬ。塵灰たちのほりて、さかりなる
煙のことし。地のうこき家のやふるゝをと、いかつちにこと
ならす。屋のうちにをれは、たちまちにひしけなむとす。
175はしり出れは、又地われぬ。羽なけれは空へもとひ
あからす。龍ならねはや雲にものほらす。おそれの中に」11ウ

163御時（178時に）
164有ける（179有けり）
166おひたゝしき（181おひたゝしく）
170馬（186駒）　170たちと（186たてと）
170都（187声）　170ほとりは（187ほとりには）
171在々所々（187村々所々）　172たちのほりて（189立あかりて）
174ひしけなむとす（191ひしけなとす）
175空へもとひあからす（192空をも飛へからす）　176ならねはや（193ならねは）

おそるへかりけるは、たゝ地振なりけりとそおほえ侍し。
その中に、武者ひとり子の、六七はかりなる侍しか、つい
ちのおほいの下に小家をつくりて、はかなきあとなし
ことをしてあそひ侍しか、にはかにくつれうつめら
れて、あとかたなくひらにうちひさかれて、ふたつ
のめなと一寸はかりつゝうち出されたるを、父母かゝへ
て、こゑをおしますかなしひあひて侍しこそ、あはれ
にかなしく見侍しか。子のかなしみには、武者もはち
をわすれけると覚えて、いとおしく、ことはりかなと
見侍し。かくて、おひたゝ敷ふること、しはしにてやみ
にしかとも、そのなこりしは〳〵たえす。よのつねにおと
ろくほとのない二三十度ふらぬ日はなし。十日、廿日すき
にしかは、四五度、二三度、もしは日こと、ひゝとひませに、
二三日なと、おほかたそのなこり三ケ月はかりや侍けん。
四大種の中に水火風は害をなすものなれとも、
大地にいたりてはことなる変をなさす。むかし、斉衡
の比とかや、おいないふりて、東大寺の仏のみくしおち
なとして、いみしきこととも侍けれとも、なをこのた

」12オ

」12ウ

177とそ（194とこそ）　177侍し（194侍れ）
178その中に～186見侍し（195ナシ）
186ふる（195ふれる）
189ひませに（199日ませ）
190二三日なと（199二三日に一度なと）
193比とかや（202比とか）　193おいない（202大なゐ）

195ひにはしかすとそ。すなはち、あちきなきことを人
みなのへて、いさゝか心のにこりもうすらけると見えし
かとも、月日かさなれり、年こえしかは、ことの葉に
かけていひ出る人たにもなし。すへて、世の中のあり
にくゝ、わか身とすみかとのはかなくあたなるさま、
200かくのことく、いはんや、所により身のほとにしたかひて、
心をなやますこと、あけてかそふへからす。もしをのか身
かなはす、権門（ケン）のかたはらにおるものは、ふかくよろこふ
ことあれとも、おいきにたのしむにあたはす。なけき甲
なる時も、声をあけてなくことなし。進退やすからす、たち」13オ
205いにつけてをそれをのゝく。たとへは、雀の鷹の
巣にちかへけるかことし。もしまとしくて、とめる家の
隣におるものは、朝夕のすほきすかたはちて、へ
つらひつゝ出入。妻子僮僕（ホク）のうらやめるさまを見る
にも、とめる家の人ないかしろなる気色をみるにも、心念」13ウ
210にうこきて、時としてやすからす。もしせはき地にを
れは、火事ある時、その失をのかるゝ事なし。もし
辺地にあれは、往反わつらひおほく、盗賊のなんはな

195あちきなきことを人みなのへて（205みな人あちきなき事を述て）　196うすらける（206うすらけり）　197かさなれり（206かさなり）

200ことく（210ことし）　200したかひて（210随つゝ）　201こと（211事は）　201をのか身（212をのか身を）　202かなはす（212かなはすして）　202かたはらに（212傍にに）　203おいきに（213大に）　203甲なる（214切なる）

206ちかへける（216ちかつける）　206もしまとしくて（217貧くして）　207おる（218をれる）

207朝夕の（218朝夕）　207すかた（218姿を）

209念に（221念々に）

211火事ある（222近く炎上ある）　211失（223害）

はたし。又、いきほいあるものは貪欲ふかく、ひとりみ
なるものは人にかろしめらる。たからおほけれはをそれ
215おほく、まつしけれはうらみ切なる。人をたのめは、み
他の者となり、人をはくゝめは、心恩愛につなかる。世
にしたかへは身くるし、したかはねは狂せるにゝたり。
いつれの所をしめ、いかなるわさをしてか、しはしも此身
をやとし、玉ゆらも心をやすむへき。わか身父かた
220の祖母の家をつたへて、久しくかの所にすむ。其
後縁かけ身をとろへて、しのふかた〳〵しけかりし
かとも、つゐにあとゝむることをえす。三十余にして、さら
に我心ひとつのいほりをむすふ。これをありしすまゐ
になそらふるに、十分か一也。たゝ居屋はかりをかまへて、
225はか〳〵しくはし屋をつくるに及はす。わつかにつ
いちをつけりといへとも、門たつるたつきなし。竹をは
しらとして、車をやとせり。雪ふり風吹ことに、あ
やうからすしもあらす。所は河原ちかけれは、水の
なんもふかく、しらなみのをそれもさはし。すへて、あらぬ世
230をねんし過しつゝ心をなやませることは、三十余年也。

」14オ

」14ウ

214かろしめらる（226かるしめらる）
215切なる（227切なり）　215たのめは（227頼むとすれは）　215み他の者となり、人をはくゝめは、心（227ナシ）　216つなかる（228つかはる）

222あとゝむる（233あととゝむる）
223我心（234我心に）
224なそらふる（235なすらふる）
225ついち（238ついひち）

229さはし（242さはかし）

そのあひた、おり〳〵のたかひめに、をのつからみしかき運
をさとりぬ。則、いそちの春をむかへて、家を出て世」15オ
をそむけり。もとより妻子なけれは、捨かたきよ
すかもなし。身に官禄あらす、何につけてか執を
235と、めむ。むなしく大原山の雲にふして、又五かへり
の春秋をなんへにける。こゝに、六十の露きえかた
にをよむて、さらにすゑ葉のやとりをむすへる
ことあり。いはゝ、旅人の一夜の宿をかり、老たるかひ
このまゆをいとなむかことし。是を中比のすみかに
240なすらふれは、百分か一にたに及はす。とかく」15ウ
いふほとに、よはひはとし〳〵にたかく、すみかはおり〳〵に
せはし。その家のありさま、よのつねならす。ひろさ
はわつかに方丈、たかさは七尺かうち也。所をおもひさ
ためさるかゆへに、地をしめてつくらす。土居をくみ、う
245ちおほひをふきて、つきめことにかけかねをかけたり。も
し心にかなはぬ事あらは、やすくほかにうつさんかため也。
そのあらためつくる時、いくはくのわつらひかある。つむと
ころはわつかに二両也。車のちからのむくふるほか、さら」16オ

234身に（247身）

247つむところは（262つむ所）

に他の用途いらす。いま、日野山のおくにあとをかく
250してうしろ、ひんかしに三尺あまりのひさしをさして、
柴おりくふるよすかとす。南に竹のすのこをしき、
その面に堞をし、そのにしにあかたなをつくれる。北に
よせてさうしをへたてゝ阿弥陀仏の絵像を安置し、
そはに普賢をかけ、まへに法花経ををけり。ひむかし
255のきはにわらひのほとろをしきつゝ、夜の床とす。
西面に竹のつりたなをかまへて、くろき皮子三合を
おけり。すなはち、和哥管弦往生要集ことときの
抄物を入たり。かたはらに箏琵琶をの〳〵一ちやうを
たつ。いはゆる折箏続琵琶、これなり。かりの庵の有
260さま、かくのことし。そのところのさまをいはゝ、南にかけひ
あり。岩をたてゝ水をためたり。林軒ちかければ、つま
木をひろふにともしからす。名をと山といふ。まさ木のか
つら、あとをうつめり。谷しけゝれと、西はれたり。観念
のたよりなきにしもあらす。春は、藤なみを見る。紫
265雲のことくにして、西方ににおふ。夏は、杜鵑をきく。か
たらふことして山路をちきる。秋は、日くらしの声、耳に

」16ウ

」17オ

249日野山（264日野の山）
252堞をし、そのにしに（267ナシ）　252つくれる（267つくれり）　253へたてゝ（268へたて）
253阿弥陀仏（268阿弥陀）

265におふ（281おほふ）
266して山路（282しての山路）

みてり。うつせみの世をうなしむかときく。冬は、雪をあはれふ。つもり消るさま、罪障にたとへつへし。もし念仏ものうく、と経まめならぬ時は、みつからやすみ、みつからおこたる。さまたくる人もなく、はつへき人もなし。ことさらに無言をせされとも、ひとりおれは、口業おさめつへし。かならす禁戒をまもるとしもなけれとも、きやうがいなけれは、何に付てかやふらん。もし又あとのしらなみにこの身をよするあしたには、岡の屋に

」17ウ

ゆきかふ舟をなかめて満誓沙弥か風情をぬすむ。もし桂の風葉をならす暮には、潯陽の江をおもひやりて源都督のなかれをならふ。余興あれは、しは〳〵松のひゝきに秋風をたくへ、水の音に流水の曲をあやつる。げいはこれつたなけれとも、人の耳をよろこはしめんとにもあらす。ひとりしらへひとり詠して、みつから情をやしなふはかり也。又、ふもとにひとつの柴のいほりあり。則、此山もりかおるところ也。かしこに小童あり。とき〳〵きたりてあひとふらふ。よしつれ〳〵なるときは、これを友としてあそひ

」18オ

267うなしむ（284かなしむ）　267きく（284きこゆ）　267あはれふ（285憐む）
269時（287日）
271無言を（288無言をを）
275ぬすむ（293ぬすみ）
276潯陽（294尋陽）
278秋風（296秋風の楽）　278流水（297流泉）
279あやつる（297あやつり）
280よろこはしめんとにも（298よろこはしむるとも）　280ひとりしらへ（299ナシ）
281情（299心）
284よし（301もし）　284あそひありく（302遊

285ありく。かれは十歳、これは六十のよはいことのほか
なれと、心をなくさむること、是おなし。或はつはなをぬ
き岩なしをとり、又、ぬかこをもりせりをつむ。或はす
そはの田ゐにいたりて、おちほをひろひてほくみを
つくる。もし日うらゝかなれは、岑によちのほりて、
290はるかに古郷の空をのそみ、木幡伏見の里、鳥羽
はつかしを見る。勝地はぬしなけれは、心をなくさむる
にさはりなし。あゆみわつらひなく、心さしとをくいた
るときは、これより嶺つゝき炭山をこえ、かさとりを
過て、或は岩間にまいり石山ををかむ。又、あは津
295の原をわけつゝ、せみかの翁か跡をとふらひ、田上川を
わたりて、猿丸まうちきみか墓を尋ぬ。かへるさをは、
おりにつけつゝ、桜をおり紅葉をもとめ、わらひをお
りこのみをひろひて、かつは仏にたてまつり、かつは
家つとにす。もし夜しつかなれは、まとの月に
300こ人をしのひ、猿の声に袖をうるほす。草むら
のほたるは、とをき槇の嶋のかゝり火にまかひ、暁の
雨は、をのつから木葉吹風ににたり。山鳥のほろ〳〵

」18ウ

」19オ

行す）

287すそは（306すそ川（はイ））
288おちほを（306落穂）

293これより（311ナシ）
294まいり（312まうて或）
295せみか（313蝉歌）
296かへるさをは（315かへるさまには）
297桜をおり（316桜をかり）

301とをき（320遠く）
302木葉吹風（321木の葉吹嵐）

となくをきゝては、父か母かとうたかひ、岑のかせきの
ちかくなれたるにつけても、世に遠さかるほとをしる。
305或は、うつみ火をかきおこして、老のね覚の友とす。お
そろしき山ならねと、ふくろふの声をあはれむにつ
けても、山中の景気、おりに付てつくる事なし。いはむ
や、ふかくおもひふかくしれらむ人は、これにしもかきるへ
からす。おほかた、此ところにすみそめしときは、あから
310さまと思ひしかとも、いますてに五とせをへたり。かりの
庵ふる屋となりて、軒にはくち葉ふかく、とゐにはこけむせ
り。をのつからことのたよりに都をきけは、この山にこもり
ゐてのち、やむことなき人のかくれ給つるも、あまたきこ
ゆ。まして、その数ならぬたくひ、つくしてこれをしるへ
315からす。たひ〳〵の炎上にほろひたる家、またいくそは
くそ。たゝ、かりの庵のみのとけくして、をそれなし。程せは
しといへとも、夜るふす床あり、ひるゐる座あり。身ひと
つをやとすに不足なし。かう蛾なは少貝をこのむ。これ、み
をしれるによりて也。みさこはあら磯にゐる。すなはち、人を
320をそるゝゆへ也。我、またかくのことし。身をしり世をしれ

」19ウ

」20オ

」20ウ

303きゝては（322きゝても）
306あはれむ（326あはれふ）
307景気（327気色）
308しれらむ人は、これ（328しられんためには、爰）
311とゐには（332土居）
313給つる（334給へる）
317身ひとつ（339一身）
318かう蛾な（340かうな）　318少貝（340ちいさき貝）　319しれる（341しる）
320我（342我身）

らは、ねかはす、ましらす。たゝ、しつかなるをのそみとし、うれへなきをたのしみとす。すへて、世の人のすみかをつくるならひ、かならすしも身のためにせす。あるひは妻子けんそくのためにつくり、あるひは親昵朋友のためにつく325る。或は主君師匠をよひ財宝馬牛のためにさへ是をつくる。我、いま、身のためにむすへり。人のためにつくらす。ゆへいかむとなれは、いまの世の有様、この身のはて、ともなふ人もなく、たのむへきやつこもなし。」21オたとひひろくつくれりとも、たれをかやとし、たれ330をかすへん。それ、人の友たるものは、とめるをたふとみ、ねんころなるをさきとす。かならすしもなさけあるとすなほなるとをは愛せす。たゝ絲竹花月を友とせむにはしかす。人のやつこたるものは、賞罰はなはたしく、恩顧あつきをさきとす。さらに、はくゝみあはれむといへとも、335やすくしつかなるをはねかはす。たゝ、我身を奴婢とするにはしかす。いかゝ我身を奴婢とするならは、もしすへきことあれは、すなはちをのか身をつかふ。たゆからすしもあらねと、人をしたかへ人をかへりみるよりはや」21ウ

323ために（346為には）
325馬牛（348馬車）
327つくらす（350非す）
332をは（355を）
334はくゝみあはれむといへとも（358はこくみあはれふと）
336奴婢（360やつこ）336するならは（360するとならは）
338したかへ人（362したかはん）

すし。もしありくへきことあれは、みつからあゆむ。くる
340しといへとも、馬鞍牛車と心をなやますにはし
かす。いま、一身をわけて、二の用をなす。手のしもへ、
足のゝりもの、よくわか心にかなへり。こゝろ身のくる
しきをしれは、くるしきときはやすみつゝ、まめ
なれはつかふ。〳〵とても度々すくさす。ものうしとても
345心をうこかすことなし。況、つねにありきつゝはたら
くは、これ養生なるへし。なむそいたつらにやすみ
おらむ。人をくるしめ、人をなやますは、又、罪業なり。
いかゝ他のちからをかるへき。衣食のたくひ、又おなし。藤
ころも、あさのふすま、うるにしたかひてはたへをかくし、
350野へのつはな、岑のこのみ、わつかにいのちをつくはかり也。
人にましはらされは、姿をはつる悔もなし。かてともし
けれは、をろかなれとも哺をあまくす。すへて、かやう
のたのしみ、とめる人に対していふにはあらす。たゝ、我
身ひとつにとりて、むかしといまとをなそらふるはかり也。
355世をのかれ身をすてしより、うらみもなく、をそれも
なし。いのちは天運にまかせて、おします、いとはす。身を

」22オ

」22ウ

341わけて（366わかちて）　341しもへ（367やつこ）
343しれは（368しれらは）　343くるしき（368くるしむ）　343やすみ（368やすめ）
345況（371いかにいはんや）　345ありきつゝ（371ナシ）　346養生（371養性）　346やすみ（372やすめ）　347人をくるしめ（372ナシ）
348藤ころも（374藤の衣）
351はつる悔もなし（377はつるに悔なし）
352をろかなれとも（378をろそかなれとも）
353たのしみ（379たのしひ）
355世をのかれ～359のこれり（381ナシ）

は浮雲になすらへて、たのます、またしとせす。一期の
たのしみは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の
のそみは、おり〳〵の美景にのみのこれり。それ、三
360かいはたゝ心ひとつなり。心もしやすからすは、象馬
七珍もよしなく、くうてんろうかくものそみなし。いま、さ」23オ
ひしきすみか、一間の庵、みつからこれを愛す。をのつ
から都に出て、身の乞丐になれることをおもへと
も、かへりてこゝにおる時は、他の俗塵に着することを
365あはれふ。もし人このいへることをうたかはゝ、うをととりと
のありさまを見よ。魚は水にあかす。うをにあらさ
れはその心をしらす。鳥は林をねかふ。鳥にあらされ
はその心をしらす。閑居の気味も又おなし。すます
してたれかさとらむ。抑一期の月影かたふきて、余」23ウ
370算山のはにちかし。たちまちに三途のやみにむ
かはむ時、いつれのわさかかこたむとする。仏の人をゝ
しへ給ふおもむきは、ことにふれて執心なかれ
となり。いま、草庵を愛するもとかとす。閑寂に
着するもさはりなるへし。いかゝ用なきたのしみを

362すみか（383住居）　362愛す（384愛とす）
363身の（384ナシ）
364俗塵（386俗玄）　364着する（386はつる）
366ありさま（387さま）
371わさか（393わさをか）
373愛する（395愛とする）

375のへて、むなしくあたら時をすくさむ。しつかなる暁、
此理をおもひつゝけて、自心に問ていはく、世をのか
れて山林にましはるは、心をおさめて道ををこなはむ
ためなり。しかるを、汝、すかたはひしりにして、心は濁にし
めり。すみかは則浄名居士のあとをけかせりといへ
380とも、たもつところはわつかに周梨般特か行にたに
もおよはす。もしこれ、貧賤の報のみつからなやます
か。将亦、妄心のいたりて狂せるか。その時、心さらにこたふるこ
となし。たゝ、舌根をやとひて、不情阿弥陀仏両三返
を申てやみぬ。于時、建暦の二とせやよひの晦日の　」24ウ
385比、桑門の蓮胤、と山の庵にして、これをしるす。
月影はいる山のはもつらかりき
たえぬひかりをみるよしもかな
雖悪筆憚多候、御望故、玄旨之本にて
書写畢。　」25オ

375のへて（397述て）
383三返を（407三反）
384于時（407ナシ）384晦日の比（407つこもり比）

翻刻B　慶長十年幽斎自筆本

・永青文庫叢刊所載影印によって翻刻する。基本的に通行字体に改めるとともに、私に句読点などを施した。
・行末を／で示し、各行頭に行番号を付した。また、半丁ごとの末尾に、 」（1オ）などと記した。

1行川のなかれは絶すして、しかも本／2の水にあらす。よとみにうかふうたか／3たは、かつきえかつ結ひて、久しく／4とゝまる事なし。世中にある人と栖／5と、又かくのことし。玉敷の都のうちに／6棟をならへ、甍をあらそへる、たかき賤き／7人のすま居は、代々をへて尽せぬ物なれ／8と、是を誠かと尋ぬれは、昔有し家は」（1オ）9まれ也とこたへぬ。或は、去年破て今年／10造れり。或は、大家はほろひて小家と／11なる。すむ人もこれおなし。所もかはらて人／12もおほかれと、いにしへ見し人は卅人か中／13にわつかにひとりふたり也。朝に死夕に／14生るゝならひ、たゝ水の泡にそにたりける。／15しらす、生れ死する人、何方より来て何／16方へかさる。又しらす、かりのやとり、誰か」（1ウ）17為にか心をなやまし、何によりてか目を／18悦はしむる。其あるしと栖と無常を／19あらそふさま、いはゝ朝かほの露にこと／20ならす。或は、露落て花残れり、残ると／21いへとも朝日にかれぬ。或は、花しほみて露／22なをきえす、消すといへとも夕を待事／23なし。予、物の心をしれりしより四十の／24春秋を送る間に、世の不思議をみる」（2オ）25事、やゝ度々に成ぬ。去安元三年四月／26廿八日かとよ、風はけしく吹て閑なら／27さりし夜、戌の時はかりに、都の東南より／28火出来て西北にいたる。はてには朱雀門・／29大極殿・大学寮・民部省まてうつりて、／30一夜のうちにちり灰と成にき。火もとは、／31樋口冨小路とかや、病人をやとせるかりや／32より出来けるとなむ。吹まよふ風にとく」（2ウ）33うつり行ほとに、扇をひろけたるこ／34とく末ひろに成ぬ。又、遠き家は煙に／35むせひ、近きあたりはひたすらほのをゝ／36地に吹つけたり。空に灰を吹たてぬれ／37は、火の光に映して、あまねく紅なる中に、／38風にたへす吹乱したるほのを、飛かことく／39にして一二町をこえつゝ、其中にある人、／40うつゝの心あらんや。或は煙にむせひてたふれ」（3オ）41ふし、或はほのをにまくられて忽に死ぬ／42或は身ひとつからうしてのかるれとも、資財／43を取

出るに及はす。七珍万宝さなから灰／44燼と成にき。その費いくそはくそ。此たひ公卿／45の家十六やけたり。まして其外はかそへ／46しるすに及はす。惣して都の中三分か一／47にをよへりとそ。男女死ぬる者数十人、馬／48牛の類辺際をしらす。いとなみおろかなる」（3ウ）49中に、さしもあやうき京中の家を作る／50とて、宝を費し心をなやます事は、す／51くれてあちきなくそ侍る。又、治承四年／52卯月十二日の比、中御門京極のほとりより／53大なる辻風おこりて、六条わたりまてい／54かめしく吹事侍りき。三四町をかけて／55吹まくる間に、其中にこもれる家／56とも、大なるもちいさきもひとつとして」（4オ）／57破さるはなし。さなからひらにたふれたるも／58あり。けた柱はかりのこれるもあり。門の上を／59吹はなちて、四五町か外にをき、又、垣を吹は／60らひて、隣とひとつになせり。いはんや、家／61のうちの資財、数をつくして空にあかり、／62ひわたふきいたの類、冬の木葉の風にみ／63たるゝかことし。塵をけふりのことく吹たて／64ぬれは、すへて目も見えす。おひたゝしく」（4ウ）65なりとよむ音に、物いふ声もきこえす。地／66獄の業風なりともかはかりにこそとそ／67覚し。家の損亡するのみにあらす、是を／68とりつくろふ間に身をそこなひて、かたは／69つける者、数をしらす。此風ひつしさるの／70かたにうつり行て、おほくの人の歎をな／71せり。辻風は常に吹風なれ共、か。る事／72やはある。たゝ事にあらす、さるへき物の」（5オ）73さとしかなとそうたかひ侍りし。又、同四年／74みな月の比、俄に都遷侍りき。いと思の外／75なりし事也。大かた此京のはしめをきけは、／76嵯峨天皇の御時事定けるより後、既数／77百歳をへたり。殊なる故なくてたやすく／78あらたまるへくもあらねは、是を世の人安から／79す愁あへるさま、さる理にも過たりき。さ／80れとも、とかくいふかひなく、みかとより始たて」（5ウ）81まつり、大臣公卿皆こと〳〵くうつり給ぬ。／82世に仕るほとの人、誰か独故郷に残りをらん。／83司位に思ひけかけ、主君のかけをたのむほ／84との人は、一日なりともとくうつろはんとは／85けみあへり。時を失ひ世にあまされ、期する／86所なき物は、愁なからも留りをり。軒をあら／87そひし人のすまゐ、日をへつゝあれゆき、／88家はこほたれて淀川にうかひ、地は目」（6オ）89の前に畠となる。人の心もあらたまりて、／90只馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする／91人なし。西南海の所領をねかひ、

東北国の庄／92園をこのます。其時、をのつから事のたより／93有て、津の国の今の京に至りて、所のあ／94り様をみるに、其地ほとせはくて、條里／95をわるにたらす。北は山にそひて高く、南は／96海近くて下れり。波の音つねにかまひす」（6ウ）97しく、塩風殊にはけし。内裏は山の中なれ／98は、彼木の丸殿もかくやと、中〳〵様かはりて、／99優なるかたも侍りき。日々にこほちて、川も／100せにはこひくたす家は、いつくに作れるに／101かあらん。猶、むなしき地は多く、造れる屋は／102すくなし。故郷は既あれて、新都はいまたなら／103す。ありとある人は皆、浮雲の思をなせり。／104もとより此所にをる者は、地を失ひてうれ」（7オ）105へ、今うつりすむ人は、土木の煩ある事を歎く。／106道のほとりをみれは、車にのるへききはゝ／107馬にのり、衣冠布衣なるへきはおほく直垂／108をきたり。都の条里忽にあらたまりて、たゝ／109ひなひたる武者に殊ならす。世の乱るゝ瑞相／110とかきをけるもしるく、日をへつゝ世中うき／111立て、人の心もおさまらす、民の愁つゐにむ／112なしからさりけれは、同年の冬、猶此京に帰」（7ウ）113給ひにき。されと、こほちわたせりし家共／114は、いかゝ成にけるにか、悉もとのやうにしも／115つくらす。伝聞、古のかしこき御代には、／116憐をもつて国をおさめ給。則、御殿にかやを／117ふきても、軒をたにも調へす、烟のともしきを／118見給時は、限ある御調物をさへゆるされ／119き。是、民をめくみ世を助給ふによて也。今の／120世の有さま、昔になすらへて知ぬへし。又、」（8オ）121養和の比かとよ、久しく成て覚えす。二年／122か間世中飢渇して、浅ましき事侍き。或／123春夏日てり、或秋大風大水、よからぬ事共／124打つゝき、五穀悉みのらす。むなしく春田／125返し夏うふるいとなみ有て、秋苅冬収るそ／126めきなし。是によりて、国々の民、或家を忘て／127山に住、或地を捨て堺を出ぬ。様々の御祈／128はしまりて、なへてならぬ法共行るれとも、更」（8ウ）129にそのしるしなし。京のならひ、なにはにつ／130けても、みな、もとは田舎をこそたのめるに、／131たへてのほる物なけれは、さのみやはみさほも／132つくりあへん、念しわひて、さま〳〵の宝物／133かたはしよりすつるかことくすれ共、更目み／134たつる人なし。たま〳〵かふる物は、金をかろくし／135粟をくはす（重くす）。乞食道の辺に愁かなしむ声／136耳にみてり。まへの年（年）、かくのことくして、明るとしは」（9オ）137立なをるへきかと思ふほとに、剰疫病うちそ／138

ひて、まさるさまに跡かたなし。人みなやみ／139死ければ、日をへつゝきはまり行さま、少／140水の魚のたとへにかなへり。はては、笠打き／141足引つゝみ、よろしき姿したる者、ひたすら／142家ことにこひありくかとすれば、皆うち／143たふれふししぬ。つい。ちのつら道のほとりに／144うへしぬるもの、類、数もしらす。とりすつる」（9ウ）145わさもしらねは、くさき香世界にみち〳〵て、／146かはり行かたちありさま、目もあてられぬ／147事おほかり。いはんや、河原なとには、馬車の／148行ちかふ道たにもなし。あやしの賤山かつも力／149尽て、薪さへともしく成ゆけは、たのむ／150かたなき人は、みつから家をこほちて市に出／151てうるに、一人か持出ぬるあたい、なを百か命を／152ささふるにたに及はすとそ。あやしき事は、」（10オ）153かゝる薪の中に、あかき丹つき、薄なと所々／154にみゆる、あひましれり。是尋ぬれは、す／155へきかたなきものゝ、ふるき寺にいたりて仏／156をぬすみ、堂の物の具を破取て、わりく／157たきけるにや。濁悪の世にしも生れあひ／158て、かゝる心うきわさをなん見侍りし。又、いと／159あはれなる事も侍りき。さりかたき夫妻／160なと持たる者は、其思ひまさりてふかき」（10ウ）161者、必さきたちて死ぬ。其ゆへは、我身を次／162にして、人をいたはしく思ふ程に、えたるくい物／163をも先かれにゆつるによりてなり。されは、親／164子ある三者は、定れる事にて、親そさきに／165立にける。又、母か命つきたるをもしらすして、／166いときなき子の、乳をすひてふせるなとも有／167けり。仁和寺の隆暁法印といふ人、かくしつゝ数もし／168らす死ぬるをかなしみて、聖あまたかたらひて、」（11オ）169その首のみゆる毎に額に卍ア字をかきて、／170縁をむすはしめしむるわさをなんせられける。／171人数をしらんとて、四五両月かほとをかそへたりけれ／172は、京の中、一条よりは南、九条よりは北、京極よ／173りは西、朱雀よりは東の、道のほとりなるかうへ、／174すへて四万二千三百余なん有ける。いはんや、其／175前後に死ぬる者もおほく、又、川原白河西京、／176もろ〳〵の辺地なとを加へていはゝ、際限も有へ」（11ウ）177からす。いかにいはんや七道諸国をや。崇徳院／178の御位の時に、長承の比とかや、かゝるためし／179有けりときけと、その有さまはしらす。ま／180のあたりいとめつらかなりし事也。又、建久元／181年七月九日かとよ、おひたゝしく大なゐふる／182事侍き。其あり様よのつねならす。山はく／183つれて川をうつみ、海は

かたふきて陸地を／184ひたせり。土さけて水わきいて、いはほわ」（12オ）185れて谷にまろひ入。渚こく舟は波に／186たゝよひ、道行駒は足のたてとをまとは／187せり。声のほとりには、村々所々、堂舎塔／188廟一として全からす。或はくつれ、或たふれぬ。／189塵灰立あかりて、盛なる煙のことし。地のうごき／190家のやふるゝ音、いかつちにことならす。屋の／191内にをれは、忽にひしけなとす。はしり／192出れは、又地われぬ。羽なけれは空をも飛」（12ウ）193へからす。龍ならねは雲にものほらす。恐の中／194に恐へかりけるは、たゝ地振也けりとこそ覚侍／195れ。かくて、をひたゝしくふれる事、しはしにて／196やみにしかとも、その名残しは〳〵絶す。よ／197のつねに驚ほとのなゐ二三十度ふらぬ日は／198なし。十日、廿日過にしかは、四五度、二三度、もしは／199日こと、ひゝと日ませ、二三日に一度なと、大かたそ／200の名残三ケ月斗や侍けん。四大種の中に」（13オ）201水火風は害をなすものなれ共、大地に至て／202は殊なる変をなさす。昔、斉衡の比とか、大／203なゐふりて、東大寺の仏のみくし落なとして、／204いみしき事共侍けれ共、猶此度[二]はしかすと／205そ。則、みな人あちきなき事を述て、聊心の／206にこりもうすらけりとみえしかとも、月日かさ／207なり、年越しかは、ことのはにかけていひ出る／208人たにもなし。すへて、世の中のありにくゝ」（13ウ）209我身と栖とのはかなくあたなるさま、かく／210のことし。いはんや、所により身のほとに随／211つゝ、心をなやます事は、あけてかそふへから／212す。もしをのか身をかなはすして、権門の傍に／213にをる者は、ふかく悦ふことあれとも、大にた／214のしむにあたはす。歎切なる時も、声をあ／215けて泣ことなし。進退安からす、立居に／216つけて恐れ惶く。たとへは、雀の鷹孕巣[の]にち」（14オ）217かつけるかことし。貧くして、冨る家の隣に／218をれる者は、朝夕すほき姿を恥て、へつらひ／219つゝ出入。妻子僮僕のうらやめるさまを見る／220にも、とめる家の人ないかしろなる気色を／221みるにも、心念々に動て、時としてやすからす。／222もしせはき地にをれは、近く炎上ある時、／223其害をのかるゝ事なし。若辺地にあれは、／224往反わつらひ多く、盗賊の難甚し。又、いき」（14ウ）225ほひある者は貪欲ふかく、独身なる者は人／226にかるしめらる。宝多けれは恐れ多く、／227貧けれは恨切なり。人を頼むとすれは、恩愛に／228つかはる。世に随へは身くるし、随はねは狂せる／229に似たり。いつれの所を

しめ、いかなるわさをし／230てか、しはしも此身をやとし、玉ゆらも心をや／231すむへき。我身父方の祖母の家を伝て、久敷／232彼所にすむ。其後縁かけ身おとろへて、忍ふ」（15オ）233かた〳〵しけかりしか共、終にあとと丶むる／234事を得す。三十あまりにして、更に我心に／235一の庵をむすふ。是をありし住居になすらふる／236に、十分か一也。た丶居屋はかりをかまへて、はか／237〳〵しく端屋をつくるに及はす。わつかに／238ついひちをつけりといへ共、門たつるたつき／239なし。竹を柱として、車をやとせり。雪ふり／240風吹ことに、あやうからすしもあらす。所は」（15ウ）241河原ちかけれは、水の難もふかく、白浪の／242恐れもさはかし。すへて、あらぬ世を念し過し／243つ丶心をなやませる事は、三十余年也。其／244間、おり〳〵のたかひめに、をのつからみしかき／245運をさとりぬ。則、五十のはるをむかへて、家を／246いて世をそむけり。本より妻子なけれは、すて／247かたきよすかもなし。身官禄あらす、何に／248つけてか執をと丶めん。むなしく大原山の」（16オ）249雲にふして、又五かへりの春秋をなんへにける。／250こ丶に、六十の露消かたに及て、更に末は／251のやとりをむすへる事あり。いか丶、旅人の／252一夜の宿をかり、老たるかいこのまゆを／253いとなむかことし。是を中比の住家にな／254すらふれは、百分か一にたに及はす。とかく／255いふほとに、齢は年々にたかく、栖はおり〳〵に／256せはし。其家の有様、よのつねならす。ひろ」（16ウ）257さはは つかに方丈、高さは七尺か内也。所を／258思ひさためさるか故に、地をしめて作らす。土／259居をくみ、打おほひをふきて、つきめ毎にか／260けかねをかけたり。もし心にかなはぬ事あらは、／261安く外に移さんかため也。其あらため作る／262時、いくはくの煩かある。つむ所わつかに二両也。／263車のちからのむくふる外、更に他の用途い／264らす。今、日野の山の奥に跡をかくしてうし」（17オ）265ろ、東に三尺余のひさしをさして、柴おりく／266ふるよすかとす。南に竹のすのこを敷、／267其面にあか棚をつくれり。北によせて／268障子をへたて阿弥陀の絵像を安置し、／269そはに普賢をかけ、前に法花経を丶けり。／270東のきはに蕨のほとろを敷つ丶、よるの／271床とす。西おもてに竹のつりたなを構て、／272黒かはこ三合を丶けり。則、和哥管弦往」（17ウ）273生要集。ときの抄物を入たり。傍に箏／274比巴各一帳をたつ。いはゆるおり箏続琵琶、／275これ也。かりの庵のありさま、か

くのことし。其所／276の様をいはゝ、南にかけ樋あり。岩をたてゝ／277水をためたり。林軒近けれは、妻木をひ／278ろふにともしからす。名を外山といふ。まさきの／279かつら、跡をうつめり。谷しけゝれと、西晴たり。／280観念の便なきにしもあらす。春は、藤なみ」（18オ）281をみる。紫雲のことくにして、西方におほ／282ふ。夏は、郭公をきく。かたらふ事しての山／283路を契。秋は、日くらしの声、耳にみてり。／284空蟬の世をかなしむかときこゆ。冬は、雪／285を憐む。つもり消るさま、罪障にたとへ／286つへし。もし念仏ものうく、読経まめならぬ／287日は、みつからやすみ、みつからおこたる。さまたく／288る人もなく、恥へき人もなし。殊更に無言を」（18ウ）289をせされとも、独をれは、口業おさめつへし。必／290禁戒を守るとしもなけれとも、憶境界な／291けれは、何につけてかやふらん。もし又跡の白浪／292に此身をよする朝には、岡のやに行かふ舟／293をなかめて満誓沙弥か風情をぬすみ、もし／294桂の風葉をならす暮には、尋陽の江を思ひ／295やりて源都督の流をならふ。余興あれは、／296しは〳〵松のひゝきに秋風の楽をたくへゝ」（19オ）297水の音に流泉の曲をあやつり、芸はこれ／298つたなけれとも、人の耳をよろこはしむるとも／299非す。独詠して、みつから心をやしなふはかり也。／300又、麓に一の柴の庵あり。則、此山寺守かをる所也。／301かしこに小童あり。時々来て相とふらふ。もし／302つれ〳〵なる時は、是を友として遊行す。か／303れは十歳、これは六十の齢ことの外なれと、／304心をなくさむる事、これ同。或つはなをぬき」（19ウ）305岩なしをとり、又、ぬかこをもり芹をつむ。或は／306すそ川の田井に至て、落穂ひろひてほく味／307をつくる。もし日うらゝかなれは、嶺によちの／308ほりて、遥に故郷の空をのそみ、木幡伏見の／309里、鳥羽はつかしをみる。勝地はぬしなけれは、／310心をなくさむるにさはりなし。あゆみ煩なく、／311心さし遠くいたる時は、峯つゝきすみ山を／312越、笠とりを過て、或岩間にまうて或石山」（20オ）313をおかむ。又、粟津の原を分つゝ、蝉歌の翁の／314跡をとふらひ、田上川をわたりて、猿丸まう／315ちきみか墓を尋ぬ。かへるさまには、折につけ／316つゝ、桜をかり紅葉を求め、蕨をおり木のみを／317拾て、且は仏にたてまつり、且は家つとにす。／318もし夜閑なれは、窓の月に古人を忍ひ、／319猿の声に袖をうるほす。草むらの蛍は、／320遠くまきの嶋のかゝり火にまかひ、暁の」（20ウ）321雨は、を

のつから木の葉吹嵐ににたり。山鳥／322のほろ〳〵と啼をきゝても、父か母かとうた／323かひ、みねのかせきのちかくなれたるに付／324ても、世に遠さかるほとをしる。或、埋火を／325かきおこして、老のね覚の友とす。おそろ／326しき山ならねと、ふくろうのこゑをあはれふ／327につけても、山中の気色、折につけてつ／328くる事なし。いはんや、ふかく思ひふかくしられん」（21オ）329ためには、爰にしもかきるへからす、大かた、此／330所に住そめし時は、白地と思ひしかとも、今／331すてに五とせをへたり。かりの庵ふる屋と／332成て、軒には朽葉ふかく、土居苔むせり。をの／333つからことの便に都をきけは、此山に籠ゐ／334て後、やんことなき人のかくれ給へるも、あまた／335きこゆ。ましとて、その数ならぬたくひ、尽／336して是をしるへからす。度々の炎上にほろ」（21ウ）337ひたる家、又いくそはくそ。たゝ、かりの庵のみ／338のとけくして、恐なし。ほとせはしといへとも、／339夜ふす床あり、ひる居る座有。一身をや／340とすに不足なし。かうなはちいさき貝を／341このむ。是、身をしるによりて也。みさこは／342あら磯にゐる。則、人を恐るゝ故なり。我身、又／343かくのことし。身をしり世をし。らは、ねかはす、／344ましらす。たゝ、閑なるを望とし、愁なきを」（22オ）345楽とす。すへて、世の人の栖をつくるならひ、／346必しも身の為にはせす。或妻子眷属、／347の為に造り、或親昵朋友の為に作る。或は／348主君師匠及財宝馬車の為にさへ是を／349造る。我、今、身の為にむすへり。人の為に／350非す。故いかんとなれは、今の世の有様、此身の／351はて、伴なふ人もなく、たのむへきやつこもなく。／352たとひひろく造れりとも、誰をかやとし、」（22ウ）353誰をかすへん。それ、人の友たる者は、冨るを／354たうとみ、懇なるをさきとす。必しも情／355あるとすなほなるとを愛せす。只絲竹／356花月を友とせんにはしかす。人のやつこたる／357者は、賞罰甚しく、恩顧あつきをさきと／358す。更に、はこくみあはれふと、安く閑なる／359をはねかはす。たゝ、わか身を奴婢とするに／360はしかす。いかゝ我身をやつことするとならは、」（23オ）361もしすへき事あれは、則をのか身をつ／362かふ。たゆからすしもあらねと、人をしたかはん／363をかへりみるよりはやすし。もしありくへき／364事あれは、みつからあゆむ。くるしといへとも、／365馬くらうし車と心をなやますにはしかす。／366今、一身をわかちて、二つの用をなす。手の／367やつこ、足ののり物、よく我心にかな

へり。心身／368のくるしみをしれらは、くるしむ時はやす」（23ウ）369めつ。、まめなれはつかふ。つかふとてもたひ〳〵／370過さす。物うしとても心をうこかすこと／371なし。いかにいはんや、常にはたらくは、これ養／372性なるへし。なんそいたつらにやすめをらん。人は／373なやますは、又、罪業也。いかゝ他の力をかるへき。／374衣食の類、又おなし。藤の衣、麻の衾、うるに随／375てはたへをかくし、野へのつ花、みねの木のみ、わつ／376かに命をつくはかりなり。人にましはらされは、」（24オ）377姿をはつるに悔なし。かてともしけれは、／378をろそかなれとも哺をあまくす。すへて、／379かやうのたのしひ、冨る人に対していふには／380非す。たゝ、我身ひとつにとりて、昔と今とを／381なそらふるはかり也。夫、三界はたゝ心ひとつ也。心／382もし安からすは、象馬七珍もよしなく、宮殿楼／383閣も望なし。今、さひしき住居、一間の庵、／384みつから是を愛とす。をのつから都に出て、乞」（24ウ）385丐になれる事を思とも、帰て爰にをる時は、／386他の俗玄にはつる事をあはれふ。もし人此／387いへる事をうたかはゝ、魚と鳥とのさまを／388見よ。魚は水にあかす。魚にあらされは／389その心をしらす。鳥は林をねかふ。鳥にあらされは／390其心をしらす。閑居の気味も又同し。すます／391して誰かさとらん。抑一期の月影かたふきて、／392余算山のはにちかし。忽に三途のやみにむか」（25オ）393はん時、何のわさをかかこたんとする。仏の人／394ををしへ給ふ趣は、事にふれて執心なかれと也。／395今、草庵を愛とするも咎とす。閑寂に着／396するもさはりなるへし。いかゝ用なき末（楽）を／397述て、むなしくあたら時をすくさん。閑なる暁、／398この理を思ひつゝけて、みつから心にとひてい／399はく、世をのかれて山林にましはるは、心をおさ／400めて道をおこなはん為也。然を、汝、姿はひしり」（25ウ）401に似て、心はにこりにしめり。栖は則浄名／402居士の跡をけかせりといへとも、たもつ所は／403わつかに周梨槃特か行にたにも及はす。／404若是、貧賤の報のみつからなやますか。将又、／405妄心の至て狂せるか。其時、心さらに答る事／406なし。只、舌根をやとひて、不情阿弥陀仏両／407三反申てやみぬ。建暦の二とせ弥生のつこも／408り比、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これを」（26オ）409しるす／410月かけはいる山のはもつらかりき／411たえぬひかりをみるよしもかな」（26ウ）

付表　保最本朱校合箇所と「細川友済」本・慶長十年幽斎自筆本・名古屋本

・最上段は、武庫川女子大学附属図書館所蔵保最本『方丈記』に見られる、朱筆によって校合の加えられた箇所で、（以上6オ）などとしてその箇所の存する場所を示した（6オ以降、「以上」省略）。丁数は、『真字本方丈記影印・注釈・研究』（和泉書院、平6）に付されたものに従う。なお、同書所載の保最本影印はモノクロであって朱であるのか否か判別不可能であり、また、碧冲洞叢書第四十二輯所載の保最本翻刻には厳密に校合箇所が示されてはいるものの煩雑でわかりにくい面があるので、今回、保最本に直接よって確認した。また、最初に斜体の通し番号を付した。

・第二段は、最上段の保最本朱校合箇所に対応する、京都女子大学図書館所蔵「細川友済」本（慶長三年幽斎校合本の転写本と見られる）の本文と翻刻Aに付した行番号。複数行に及ぶ本文の場合、最初の行の番号のみ示す（第三段も同じ）。

・第三段は、最上段の保最本朱校合箇所に対応する、永青文庫所蔵慶長十年幽斎自筆本の本文と翻刻Bに付した行番号。

・第二・三段において、「細川友済」本・慶長十年幽斎自筆本の本文が、最上段の保最本朱校合箇所に示された校合本文と合致する場合は、本文を挙げずに○印を記した。逆に、保最本の朱校合本文と相違する場合にのみ本文を挙げたということである。

・ただし、前項の「合致」「相違」というのは、原則として、保最本において朱校合の対象となっている本文についてのみ見分けた結果であって、最上段に掲げた本文のうち朱校合の直接対象となっていない本文についての、「細川友済」本・慶長十年幽斎自筆本との「合致」「相違」は度外視している。

・最下段には、名古屋本について、最上段の保最朱校合本文それぞれと合致する場合にのみ○印を記し、相違する場合は空白とした。「合致」「相違」の意味は、前項に同じ。

・保最本には朱の他に黒墨と藍による校合も見られ、それらが、墨・朱・藍の順で施されたものと思われること、碧冲洞叢書第四十二輯「解題」に指摘されている。朱校合が加えられているのと同じ本文に墨の校合も施されている場合は、先にあった墨校合本文をも踏まえて朱校合が施されているものと解しておいた。例えば*168*の場合、「恩愛につかはる」の「かは」に対して、「ナカイ」と墨校合が右側に加えられるとともに左側には朱で「、、」が記されている。「つる」という本文は考え難いので、朱校合は、対校本が「つかはる」でなく墨校合本文の「つなかる」と同じ本文になっていることを示したのであ

ろう、と考えておいた。また、*126*の場合、「同し比」に対して、右側の墨校合が「建久元年七月九日」とするうえに朱の合点（「／」）が加えられ、左側に朱で「、、、」と記されている。やはり、朱校合は、対校本が墨校合本文と同じ本文となっていることを示しているのであろう。*252*の場合、碧冲洞叢書「解題」が指摘する通り、流布本に特徴的な本文「世をのかれ……残れり」（前掲[c]参照）が貼付された紙片に墨書され、同本文の該当する箇所に墨で△印が付されている。そして、「世をのかれ……」の冒頭部に朱の合点が見られる。これも、朱校合が施された際の対校本に上記本文が存することを意味するものと解しておいた。以下の表では、朱校合の対象になっているのと同一の本文について見られる墨校合本文のみ〔　〕に入れて掲げておいた。

・以下の表は、全体的な傾向を窺うためのものであって、「合致」「相違」の判断など必ずしも厳密でない面が存する。

保最本朱校合箇所	「細川友済」本	慶長十年幽斎自筆本	名古屋本
*1*人の住居（たかきいやしき）	5たかきいやしき人、すまひ	6たかき賤き人のすま居	
*2*たかきいやしき人かと（まことかと）　（以上6オ）	6○	8○	○
*3*むかしより有し	7○	8○	○
*4*まれなり。（とこたへぬ）	7○	9○	○
*5*大きなる家	8○	10○	○
*6*ちいさき家（小）になる（と）	9○	10○	○

7所も。人も	9○	11所もかはらて人も	○
8、二三十人	10○	12○	
9。水の泡に（67）	12○	14○	○
10たれか為にか、	14○	16誰か為にか	
11あらそふさま、	16あらそふさま	19あらそふさま	
12或は露は落て、	17○	20○	○
13花はしほみて、（7オ）	18○	21○	○
14春秋を、くれる、	20○	24○	○
15や。たひ〳〵に成ぬ、	21や、たひ〳〵に成ぬ	25や、度々に成ぬ	
16戌時はかりに、	23戌の時はかりに	27戌の時はかりに	
17東南、	23東南	27東南	
18西北、	24○	28西北	

19塵灰と成にき、（7ウ）	25塵灰となりにき	30ちり灰と成にき		
20ひろけたるかことく	28○	33○		
21灰を吹立ぬ。（れば）	30○	36○	○	
22風にたへす吹みた。（した）る炎	32○	38○		
23二（一）三、町（8オ）	33○	39○		
24ほのほにまくれ（つは）て、	35○	41ほのをにまくられて		
25灰燼と成にき、	37灰燼となりにき	43灰燼と成にき		
26いくそはくそ、	38いくそはくそ	44いくそはくそ		
27此度（般）（8ウ）	38○	44此たひ		
28死（ぬ）する者、	40○	47○	○	
29辺際（も）をしらす、	41○	48辺際をしらす	○	
30皆（ヒ）をろかなる	42○	48○		

31心を悩す（ナヤマ）	43○	50○		32あちきなくそ侍る。（ヘキ）	44○	51あちきなくそ侍る	○	33中御門京極のほと。（り）より	45○	52○	○	34いかめしく吹事。（侍き）
46○	53○	○	35二三（三四）町、	47○	54○	○	36吹まくる間。（に）	47○	55○	○	37残（れ）るも有	50○
58○	○	38煙のことく。（に）	55○	63けふりのことく	○	39かはかりにこそとそおほえし、	58かはかりにこそとそおほえし	66かはかりにこそとそ覚し		40坤（ひつしさる）	60○	69○
○	（9オ）	（9ウ）	（10オ）	41吹物なれとも、	62○	71吹風なれ共	○	42かゝる事や。（は）ある	63○	71○		

43、治承四年	64○	73○		
44、四百余歳	68○	76○		
45事なるにゆへなくて（10オ）	68○	77○		
46世。人	69○	78○	○	
47理り。も過たり	70○	79○	○	
48されとも、	71○	79されとも		
49皆悉うつり給ぬ	72○	81皆こと〳〵くうつり給ぬ		
50思ひをかけ。	74おもひをかけ	83思ひけかけ、		
51主君の御かけ、	74○	83○	○	
52たのむ程の人。	75○	83○	○	
53一日成ともとて（11オ）	75○	84○	○	
54とまり。	77○	86○		

55家壊ちて	79○	88○	
56牛車を用いんとする	81○	90○	○
57東北。の庄園	82○	91○	○
58をのつから。のたより	83○	92○	○
59摂津国　（11ウ）	84○	93○	
60山にそひて	86山にそひて	95山にそひて	
61かまひすしくして	87○	96○	○
62造れるにか。　（12オ）	91○	100○	○
63あれはて	93○	102○	
64なけく	96○	105歎く	
65乗へき人は	97○	106のるへききは、	
66多く直垂をきたり　（12ウ）	98○	107おほく直垂をきたり	

67 世間(中)うきたちて	101○	110○	
68 帰給ひ(に)。き	103○	112○	○
69 壊ち渡せし(出り)（13オ）	103○	113こほちわたせりし	
70 御貢物(調)	108みつきもの	118○	〈欠損〉
71 昔になすら(そ)へて	110○	120昔になすらへて	
72 二年(とせ)	111○	121二年	
73 世中(間)	112世中	122世中	
74 飢饉(渇)	112○	122○	
75 大風洪水(大)（13ウ）	113○	123○	
76 いとなみのみ有て	115○	125○	
77 そめきはなし	115○	125○	
78 或は家を……或は地(上)を……(下)	116家を……地を……	126或家を……或地を……	

79山にすみ(む)	116山にすみ	127？　山に住	
80さかひを出ぬ、	117さかひを出ぬ	127堺を出ぬ	
81都(京)のならひ　（14オ）	119○	129○	
82思(ねんし)、ひわひて、	121念しわひて	132念しわひて	
83金を軽くし(て)	124○	134金をかろくし	
84かくのことくからうして　（14ウ）	126○	136○	
85ゑ(疫痛)きれい	127疫癘	137疫病	
86世の人みな、	128○	138○	
87さまに(少)水の魚のたとへ	129○	139○	
88はてには、	129○	140○	○
89乞ありくかく(とみ)すれは	131○	142こひありくかとすれは	○
90たふれふし(しぬ)、	131たふれふし死ぬ	143たふれふししぬ	

*91*又築地の	132○	143○	
*92*うへ死ぬる者の類	132うへしぬるものゝたくひ	144うへしぬるものゝ類	
*93*かすをしらす（15オ）	133○	144○	
*94*河原なとに。	135○	147○	○
*95*行ちかふ	136ゆきちかふ	148行ちかふ	○
*96*あやしきしつ山かつ	136○	148○	
*97*ともしく成ぬれは	137○	149○	○
*98*市に出てうる。	138○	150○	○
*99*命。にたに（15ウ）	139いのちをさゝふるにたに	151命をささふるにたに	
*100*相交はれり	141○	154○	
*101*すへきかたなき者。	142○	154○	
*102*古き堂寺	142○	155○	

103 堂塔の物の具	143 ○	156 ○	○	
104 わりくた。けるとなりけり、	143 わりくたきけるにや	156 わりくたきけるにや		
105 わさをなんみる、侍し	145 ○	158 ○	○	
106 事。も侍き　（16オ）	145 ことも侍りき	159 事も侍りき		
107 、夫妻子、夫	146 ○	159 夫妻		
108 その思ひ、心さし	146 ○	160 其思ひ	○	
109 そのゆへに、は	147 ○	161 ○	○	
110 たま〳〵えたる	149 ○	162 ○		
111 定まれる事にて、こと	150 さたまれる事にて	164 定れる事にて		
112 母の命つきたるを、か	151 ○	165 ○	○	
113 、なき乳を吸て　（16ウ）	152 ○	166 ○		
114 有けり、ル	152 ○	166 有けり		

115聖（ヒ）あまた	154ひしりあまた	168聖あまた	
116かたらひて（つ）、	154〇	168かたらひて	
117みゆること（所に）、	155みゆることに	169みゆる毎に	
118京極よりは西、	158京極よりは西	172京極よりは西	
119朱雀よりは東、（17オ）	158朱雀よりは東	173朱雀よりは東	
120四万二千三百あまり（余）	159〇	174〇	
121又河原	160又河原	175又川原	
122崇徳院御在位（ヒ）	163〇	178〇	
123ためし。（は）有けると聞と、	163ためし有けるときけと	178ためし有けりときけと	
124其世の有様、	164〇	179〇	
125まのあたりみる、（17ウ）	164〇	179〇	
126同し比（建久元年七月九日）、	165〇	180〇	

127 其。様（有）	166 ○	182 ○	○
128 いはほわれて、（やふ）	168 いはほわれて	184 いはほわれて	○
129 道行駒、（馬）	170 ○	186 道行駒	
130 足のたてと、（ち）	170 ○	186 足のたてと	
131 ほとりには、	170 ○	187 ほとりには	
132 村々所々、（在々）	171 ○	187 村々所々	○
（18オ）			
133 家の破るゝ音は、	173 ○	190 ○	
134 。地われぬ（又）	175 ○	192 ○	
135 空を飛へからす（にも）（あ）（ヒ）	175 空へもとひあからす	192 空をも飛へからす	
136 龍なら。は（ね）	176 ○	193 ○	
137 雲にものほらん、（す）	176 ○	193 ○	
138 とこそ覚え侍し（ヒ）	177 ○	194 とこそ覚侍れ	○

139	ふれる事	186	○
140	そのなこり。（ヒ）（は）（18ウ）	187	そのなこり
141	よのつねの（に）、驚く	187	○
142	日毎一日ませ	189	○
143	その名残は、	190	○
144	害をなせ（すものなれ）とも	191	○
145	斉衡の比か（とかや）とよ、、、	192	○
146	御頭みくし（19オ）	193	みくし
147	侍けれと。（も）	194	○
148	人皆（人皆）あちきなきことを。のへて、、	195	○
149	いさゝか。（の）心のにこりも	196	いさゝか心のにこりも
150	うすらきける、	196	○
		196	その名残
		196	○
		199	○
		200	○
		201	○
		202	斉衡の比とか
		203	みくし
		204	○
		205	みな人あちきなき事を述て
		205	聊心のにこりも
		206	○

151 したかひつ(て)、（19ウ）	200 ○	210 随つゝ	○
152 かなはすして、	202 ○	212 かなはすして	
153 事はあれとも	203 ○	213 ○	
154 切なる時(れ共)も、、	203 甲なる時も	214 切なる時も	
155 (雀の)。たかの巣に雀の、	205 ○	216 ○	○
156 ちかつく(ける)かことし	206 ○	216 ○	
157 貧(まとし)くして	206 ○	217 貧くして	
158 隣におれる者(ヒ)（20オ）	207 ○	217 隣にをれる者	○
159 出入も憧僕(妻子)の	208 ○	219 ○	
160 人の蔑なるけしき	209 ○	220 ○	
161 心は念々にうこきて	209 ○	221 ○	
162 炎(火事)上ある時	211 ○	222 炎上ある時	

163 煩多し〔クイ〕、	212 ○	224 ○		○
164 盗賊（人）、（20ウ）	212 盗賊	224 盗賊		
165 かろしめらる。（ル）	214 かろしめらる	226 かるしめらる		
166 財あれ（多け）は、	214 ○	226 ○		
167 をそれ。（の）多く	214 をそれおほく	226 恐れ多く		
168 恩愛につかはる〔ナカイ〕、	216 ○	227 恩愛につかはる		
169 身（ヒ）くるし（21オ）	217 身くるし	228 身くるし		
170 跡とゝむる	222 ○	233 あととゝむる		
171 事。（を）えす	222 ○	234 ○	○	
172 門をたつるたつき（21ウ）	226 ○	238 ○		
173 あられぬ世（ヒ）	229 ○	242 ○		
174 思ひ（ねんし）すくしつゝ	230 ○	242 ○	○	

175 其。折〳〵の	231 ○	243 ○	○
176 家を出。（22オ）	232 ○	245 家をいて	○
177 。大原山の雲にふして	235 ○	248 ○	○
178 更に、	237 さらに	250 更に	
179 一夜の宿をつくり、	238 ○	252 ○	
180 蜑	238 ○	252 ○	
181 、又百分か一にたに及はす（22ウ）	240 ○	254 ○	
182 年〳〵。たかく	241 ○	255 ○	○
183 広さ。	242 ○	256 ○	○
184 高きは、（23オ）	243 ○	257 ○	○
185 車の力をむくふ、	248 ○	263 ○	
186 。その西に	252 その面に堞をし、そのにしに	267 其面に	

187 しやうしをへたて、	253 さうしをへたて、	268 障子をへたて	
188 阿弥陀。仏 （23ウ）	253 ○	268 阿弥陀	
189 西面南ヒ	256 西面	271 西おもて	
190 黒き皮籠、	256 くろき皮子	272 ○	
191 三合を、。き けり	256 三合をおけり	272 三合を、けり	
192 一張をたつて、	258 ○	274 ○	○
193 折琴箏次琵琶つきひは （24オ）	259 折箏続琵琶	274 おり箏続琵琶	
194 軒にちかけれはヒ	261 ○	277 ○	
195 西晴たて り、、	263 西はれたり	279 西晴たり	
196 かたらふことに、〔クニシテイ〕 （24ウ）	265 かたらふこと	282 かたらふ事	
197 かなしむかと聞ゆ、	267 ○	284 かなしむかときこゆ	○
198 守るとしもなけれとも （25オ）	272 まもるとしもなけれとも	290 守るとしもなけれとも	

199 満（誓）。阿弥	275 ○	293 ○	○
200 風情をぬすみ（む）、	275 ○	293 風情をぬすみ	
201 相像（おもひやり）て	276 ○	294 ○	
202 源都督のおこなひ（なかれ）、、、	277 ○	295 ○	
203 悦はしめんとにはあらす（も）　（25ウ）	280 よろこはしめんとにもあらす	298 よろこはしむるとも非す	
204 。柴（ひとつの）の庵り	281 ○	300 ○	○
205 遊行（あそひありく）す、	284 ○	302 遊行す	
206 我（是は）六そち	285 ○	303 ○	
207 殊外なれとも、	285 ○	303 ○	○
208 或（有時は）はつはなをぬき、	286 或はつはなをぬき	304 或つはなをぬき	
209 或（有時）はすそわの　（26オ）	287 或はすそはの	305 或はすそ川（はイ）の	
210 あるし（ぬし）、、　（26ウ）	291 ○	309 ○	○

211 いはまにまうて、、、	294 ○	312 岩間にまうて	
212 或は石山をおかむ	294 ○	312 或石山をおかむ	
213 粟津か原	294 ○	313 ○	○
214 蟬丸の。翁	295 せみかの翁	313 蟬歌の翁	
215 とふらふ、	295 ○	314 ○	○
216 猿丸のまうち君	296 ○	314 ○	○
217 基を尋ね、	296 ○	315 ○	○
218 帰。さ（27オ）	296 ○	315 ○	○
219 鳴を聞ても、	303 なくをきゝては	322 啼をきゝても	
220 山ならねは、	306 ○	326 ○	○
221 山中のけしき	307 山中の景気	327 山中の気色	
222 折につけて、（27ウ）	307 おりに付て	327 折につけて	○

223人のためには（28オ）	308○	329ためには	
224かりの庵りのみ	316○	337○	○
225かんな（蛾）	318かう蛾な	340かうな	
226ちいさき（少）具	318○	340ちいさき貝	
227身をし（れ）るによりて也	318○	341身をしるによりて也	
228世をしれ（ら）は（28ウ）	320○	343○	
229たのし（はしらす）ます	321ましらす	346ましらす	○
230身のためにはせす	323○	346身の為にはせす	
231眷属の為に……或は主君	324けんそくのために……或は主君	346眷属の為に……或は主君	
232身の為に結（つくる）へり	326身のためにむすへり	349身の為にむすへり	
233人のために作らぬ（す）	326○	349人の為に非す	○
234我（此）身のはて（29オ）	327○	350○	○

235 ひろく造。れるとも	329 ○	352 ○	○	
236 たゝすへて絲竹花月を（29ウ）	332 ○	355 ○	○	
237 奴婢となすにはしかす	335 ○	359 ○		
238 奴婢とするとならは	336 奴婢とするならは	360 やつことするとならは		
239 なすへき事あれは（30オ）	336 ○	361 ○	○	
240 一身をわかちて	341 ○	366 一身をわかちて	○	
241 二の用をなす	341 二の用をなす	366 二つの用をなす		
242 手のやつこ	341 ○	366 手のやつこ		
243 我心にかなへり	342 わか心にかなへり	367 我心にかなへり		
244 くるしみをしれは	342 ○	368 くるしみをしれらは	○	
245 くるしむ時	343 ○	368 くるしむ時	○	
246 やすめ	343 ○	368 やすめ		

247心をうこかす（30ウ）	345心をうこかす	370心をうこかす	
248又。罪業也	347○	373○	○
249をろそかなれとも（31オ）	352○	378をろそかなれとも	
250昔と今と、	354むかしといまと	380昔と今と	
251なすらふる	354○	381○	
252〔世をのかれ……残れり〕	355○	381ナシ	
253さひしきすまゐ	362○	383住居	
254乾坑に骨骸となれる（31ウ）	363○	384○	
255一期の月影	369一期の月影	391一期の月影	
256余算。山のはに（32オ）	369余算山のはに	392余算山のはに	
257わさをかかこたんとする	371○	393わさをかかこたんとする	
258用よしなき楽	374○	395○	

259 みつから（自）	376○	398 みつから	
260 おこなはんか為也（32ウ）	377○	400○	
261 周利（梨般）槃特	380○	403 周梨槃特	
262 若是（ヒ）	381 もしこれ	404 若是	
263 答る（す）事……不祥（不情）の阿弥陀仏	382 こたふること……不情阿弥陀仏	405 答る事……不情阿弥陀仏	
264 建暦の二とせ（33オ）	384 建暦の二とせ	407 建暦の二とせ	

〈付記〉

・小稿を成すに当たって、京都女子大学図書館および武庫川女子大学附属図書館よりご高配を賜りました。記して深謝申し上げます。

・慶長十年幽斎自筆本の翻刻は久田が担当し、中前が確認した。それ以外は、中前が原稿を作成し、その入力作業などを久田が担当した。さらに、全体について両者が確認作業を行った。

（本学教授）

（平成二十八年度本学大学院文学研究科博士前期課程国文学専攻修了）